



### 靖國神社みたままつり

7月13日から16日まで、恒例の靖國神社「みたままつり」が賑々しく盛大に斎行され、参詣者は延べ30万人に及んだという。

靖國神社のみたままつりは、今年、

**報 特 攻**  
 平成28年8月

### 第111号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-1-1靖國神社遊就館内・地階

電話 03 (5213) 4594  
FAX 03 (5213) 4596

http://www.tokkotai.or.jp  
振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能  
発行人 石井光政  
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

靖國神社みたままつり 理事長就任のご挨拶	1
暑中見舞い	4
第33回宮崎特攻基地慰霊祭に 参加して	5
第45回萬世特攻慰霊碑慰霊祭 に参加して	6
第57回出水市特攻碑慰霊祭に 参加して	7
第49回「戦艦大和を旗艦とす	8

第70回の節目を迎え、今や都心における新暦の一大盆祭りとしてすっかり定着したようであるが、今年も昨年引き続き、神社境内外苑での露店の出店は見合われ、酒宴は一切禁止となった。その理由は、昨27年7月1日発行の靖國神社の社報『靖國』第720号

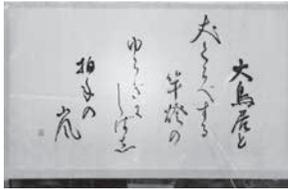
「靖濤」欄その他に掲記されているように、「ツイッター・フェイスブック等のソーシャルネットワークの普及により、近年のみたままつりは危険を感じる程の異常な人出となり（社報『靖國』平成26年12月号掲載の原田曜平氏論説参照）、一部若者たちのマナーの

る特攻艦隊戦没将士慰霊祭に 参加して	10
平成28年度秋田県特攻勇士之 像慰霊祭及び第25回秋田県 特別攻撃隊招魂祭に参加 して	11
平成28年度・第62回知覧特攻 基地戦没者慰霊祭に参加 して	14
第62回知覧特攻基地戦没者 慰霊祭に参加して	16
平成28年度・第4回「福岡県 特攻勇士慰霊顕彰祭」に参 列して	19
平成28年度・第50回「特攻殉 国の碑」慰霊祭に参加して	24
第66回関西西白鷗遺族会慰霊祭 並びに「あ、特攻」勇士之 像慰霊祭に参加して	25
殉國沖繩學徒顕彰七拾一年祭 第46回指宿海軍航空基地 「哀惜の碑慰霊追悼式」に 参加して	26
ソ連とドイツにも特攻隊は あった―身を捨てて国を 護った若者の情熱―	31
海軍飛行専修予備学生14期 の特攻―柳井氏の証言と吉田 少尉（戦死後大尉）の手記 を通して―	34
卒寿を迎えて特攻の友を偲ぶ	36
平成28年度「千葉県特攻勇士 之像慰霊祭」に参加して	42
人吉海軍航空基地跡の紹介	44
世田谷山観音寺 特攻平和観音月例法要報告 事務局からのお知らせ	45
事務局からの報告等	47

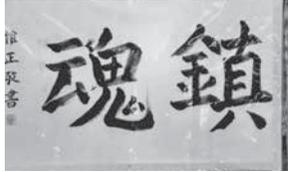
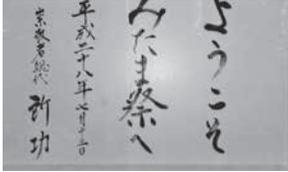
悪さは、神社近隣での迷惑行為にまで及んでいる。神社では警備員を増強するなど、様々な対策を講じてきたが、

○献燈（懸け雪洞）

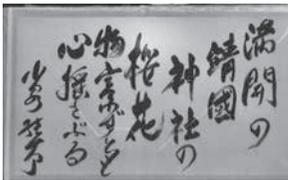
・元皇族・崇敬者総代 島津 肇子様 「大鳥居と 丈くらべする竿燈の ゆらぎにしば志 拍手の嵐」 元東宮大夫 安嶋 彌様 「散華」 崇敬者総代 阿南 惟正様 「鎮魂」 崇敬者総代 所 功様 「ようこそ みたま祭へ」 崇敬者総代 葛西 敬之様 「山紫水明」 崇敬者総代 寺島 泰三様 「萬世太平」 元内閣総理大臣 小泉純一郎様 「満開の靖國神社の桜花 物言わずとも心揺さぶる」 湯澤 貞様 元宮司	「花の宮 軍用動物 慰霊祭」 元衆議院議長 綿貫 民輔様 「至誠通神」 学者 渡部 昇一様 「宮柱太燦」 茶道裏千家家元 千 玄室様 「和敬」 茶道裏千家家元 千 宗室様 「無心」 漫画家 ちばてつや様 「日本が 世界中から恐がられる のではなく 愛される国になり ますように」 五代目 一龍斎貞花様 「祖国平安 靖國安寧」 女優 伊藤つかさ様 「そうだこの螢だ 俺 この 螢になつて帰つて来るよ」 （「帰つて来た螢」より）
---	--



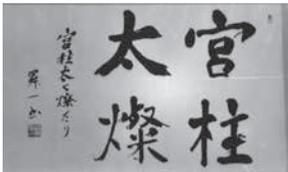
左 安嶋彌元東宮大夫・右 島津肇子様献燈



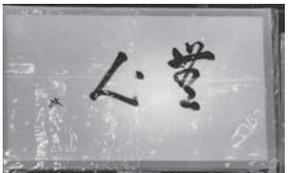
左 所功・右 阿南惟正様献燈



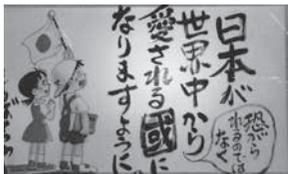
左 小泉純一郎元首相・右 寺島泰三



左 渡部昇一様・右 湯澤貞様献燈



左 千宗宣様・右 千女室様



左 一龍斎貞花様・右 ちばてつや様

載されている。その中で  
文化」と題する論稿が掲  
大学教授の「怨霊と日本  
919号に山田雄司三重  
の『學士會会報』第  
平成28年7月1日発行  
来の習俗」がそこに表さ  
れているのである。

ころにある。そしてこれ  
は我が国古来の習俗であ  
る一大盂蘭盆の行事でも  
ある。境内一面を照らす  
大小3万余の献燈や懸け  
雪洞は、精霊の迎え火と  
送り火になぞらえたもの  
であろうか。「我が国古  
来の習俗」がそこに表さ  
れているのである。

かかる状況の改善にはつながらなかつた」ということで、「残念だが、神社では当分の間、外苑での露店の出店を見合わせ、酒宴を禁止することとした」ということである。神社としては余程のことと思われる。というのは、同欄にも書かれているように、このような禁止措置が執られたのは、戦時中の「昭和14年4月、神域の森厳を図るため今次大祭より外苑の見世物興業ならびに露店の営業を許可しないことにし、催し物は奉納武道・能・相撲などに主力を置き・・・」とあるように、戦時の国民精神の作興にならつて以来のこと、むしろ、明治2年創建の招魂社以来靖國神社のお祭りは、特別な庶民感覚の賑わいを見せていたようである。それは、靖國神社の御祭神が一般庶民出の勇士や婦女子（大和男子や大和撫子）を主とした身近な方々の御霊ということにもよるのではないかと思われる。それ故に、この「みたままつり」の最大の特色は、老いも若きも世代を超えて、ここ靖國の宮居に集い、今は護国の神となられた祖父や父、兄弟、戦友たちを偲び、尊い命を捧げて国を守つた英霊の御霊を迎えて共に一夜を楽しみ、遺徳を讃え、感謝の誠を捧げるところにある。そしてこれ



外苑参道



青森ねぶた (東京ねぶた連合会)

同教授は、「日本文化の特徴は何かとの問いに、私だったら真つ先に『霊魂』と答える。古代から現代に至るまで、日本人は霊魂とともにある。それは、神であり、妖怪であり、怨霊であった。人が亡くなれば、その人の霊魂は遠い世界へ行ってしまふのではなく、身近にあつて常に子孫の繁栄を見守つていと認識されていた・・・。神もまた霊魂の一種であり、八百万神と言われるように、日本人はさまざまなところで神を見出してきた」と記されている。

この「みたままつり」の由来や意義については、当顕彰会会報「特攻」第92号に掲載の東京大学名誉教授小堀桂一郎博士著『靖國神社と日本人』（平成10年8月・P H P新書）や靖國神社社報「やすくに」第624号（平成19年7月1日）掲載の京都産業大学所功教授の論稿「みたま祭の来歴と意義」に詳しいが、神社側の資料によれば、「光の祭典『みたままつり』の由来」の概要が次のように記載されている。「みたままつり」の先駆けとなりましたのが、昭和21年7月14・15両日の2夜にわたり、境内の相撲場で催された、長野県遺族連合会主催による奉納地方民謡・盆踊り大会です。

当神社の資料によれば、この催しには3万人を超える参加者で盛況を極め、中には連合軍総司令部バーンズ少佐（14日）、ネルソン少佐（15日）も観覧し、その大会の様子は全国に録音放送された、と記録されています。

当時、この企画に関わつた靖國神社の坂本定夫禰宜（故人）は「亡き人々のみたま（神霊）を祀る日本の古俗を、お盆の季節である7月に新生靖國に復活しては」という構想を描き、大東亜戦争末期に『先祖の話』を書いた民族学者の柳田國男氏を訪ねて相談しました。柳田氏は「みたまの慰霊は極めて大事なことで、世の

平和のためにも大切だ。祭りは『華やかで風流』であるべきだ」と賛意を示された。昭和22年7月13日から4日間にわたり第1回の『みたままつり』が催され、以後恒例となりました。

現在は各界名士による揮毫の懸雪洞（かけぼんぼり）約300灯をはじめ、御遺族、戦友、崇敬者等により奉納された大型・小型の提灯約3万灯や全国の有名灯籠が掲げられ、青森ねぶた、地元麴町靖國講・芝濱睦会等による神輿振り、吹奏楽団によるパレードが行われます。外苑の大村益次郎像周辺では連日、盆踊りが、内苑の能楽堂では、日本歌手協会有志や、つのだ・ひろ氏をはじめ有名歌手による奉納公演や日本舞踊、バレエ、奇術等の芸能も催され、その賑々しさは『華やかで風流』な日本一の光の祭典であります。

13日は、靖國神社「みたままつり」の前夜祭の日である。

この時期、東京では例年、梅雨の終わりの前夜祭の日であるが、今年、台風1号の影響で西日本は暴風豪雨に襲われたものの、東京は逆に晴天続きで、都心部でも32〜33度の猛暑日が続いた。しかし予報では、東京でもこの日は大雨、時に雷雨に注意とのことであったが、朝から曇り空で、うだるような蒸し暑さながら、雨は時折ぱらつく程度で、予報が外れたのは幸いであった。

やがて宵の18時、神殿より鳴り響く大太鼓の音を合図に、一斉に点灯された約300個の懸け雪洞と大小約3万个の懸け提灯が、境内や参道一面を明るく照らし出して「みたままつり」の前夜祭は始まった。昭和22年7月13日16日に神社の正式行事として斎行されてから今年で満69年、70回の節目を迎えた。更に靖國神社では、昭和24年7月の第3回「みたま祭」以来、7月13日夕刻、みたま祭前夜祭に先立ち、旧招魂斎庭において、大東亜戦争に際し「戦陣に死し職域に殉じ非命に斃れた人々で、靖國神社に奉斎されざるみたまの慰霊祭」を「諸霊祭」と称して執行することが慣例となっていた。この「諸霊祭」では、復員局・厚生省から「祭神名票」が送られないため、神社に合祀されていない「軍人・軍属等」のほか、外地や内地で戦災等（空襲・原爆等）により死没した民間の人々もすべて一緒に慰霊することとなった。

その後、昭和40年7月、「鎮霊社」が創建されてからは、同社の例祭日でもある毎年7月13日に、「みたままつり」前夜祭後の宵祭りとして午後8時過ぎに斎行されている。「鎮霊社」は、靖國神社の第5代宮司を務められた（昭

和21年1月から昭和53年3月死去されるまでの32年間）筑波藤磨氏（元皇族・山階宮藤磨王）が、昭和39年の宗教者国際会議に出席し、ヨーロッパ諸国を歴訪して帰国された後、各国とも先の大戦で、国際条約無視の無差別爆撃や人種的迫害等により数百万にも上る非

戦闘員の犠牲者の霊を弔う祭祀が行われている現状に鑑み、我が国でもそのような祭祀を執り行う必要性を痛感され、先の大戦での原爆や空襲による死者を始め、明治維新以来の戦争・事変により死没し、靖國神社に合祀されない犠牲者、更には我が国民のみなら

ず、万国の戦争犠牲者の霊を弔い、世界の平和を祈願するために創建されたものである。同社例祭は、大樹の下、昼なお暗い靈域において、御社の二つの燈明が幽かに揺らぐのみの、暗闇に包まれ、静寂にして幽玄の氣に満ちた中での神儀

で、籥しりとりの音と共に、白装束の神官6名によって奉仕され、修祓、降神、献饌、祝詞奏上等が斎行される。参列者は、宮司以下遺族代表他十数名に過ぎない。明るる14日（日）は、夕刻18時から第一夜祭が斎行されたが、その日は予報どおり、東京も午後から激しい雷雨に

## 理事長就任のご挨拶

理事長 藤田 幸生



私は、去る7月25日付けで杉山藩理事長の後任に指名されました。どうかよろしくお願ひ申し上げます。

この機会に、今の私の気持ちを一言述べさせていただきます。

まず、自己紹介です。昭和17年に生まれた8人兄弟・姉妹の末っ子で、いわゆる「戦中派」ですが、戦争体験はありません。戦友でも、遺族でもありません。

海上自衛隊に約40年勤務してきました。退職して、15年以上になりま

す。退職後は、水交会等の自衛官O Bの諸団体役員として活動してまいりました。当会の活動に携わるようになったのは、退職後の平成17年、財団法人水交会から財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会（当会の前身）への派遣の形からでした。山本卓真会長、菅原道照理事長の時代です。その後、菅原理事長の後を受け、理事長を拝命しました。公益財団法人に改編された時、専務理事となり、副理事長を経て、この度の理事長拜命に至った次第です。

この間に携わった事業としては、フィリピン等、国内外慰霊祭等参列、「あ、特攻」CDの制作頒布、同勇士の像の各護國神社への建立奉納、同ミニチュア像制作頒布、戦艦「大和」水上特攻艦隊徳之島慰霊塔修復事業、「海軍特別攻撃隊第5七生隊 森丘哲四郎手記」の出版頒布等があります。その都度、関係された皆様には、大変お世話になりました。有り難うございました。このように、当会での活動期間は10年以上になります。毎年、靖國神社、世田谷山観音寺において斎行されてきた陸海軍全特攻隊戦没者の春秋慰霊祭齋行に携わり、また、世田谷山観音寺の特攻観音堂における月例法要にも参

列してきました。特攻演劇等も観賞し、その他取材等も受けてきました。それら、いずれの活動におきましても、「特別攻撃隊のこと、特攻隊で戦没された方のことを、後世に如何に伝えていくか」ということは、大きな課題でした。先の大戦では、日本人だけでも、約330万人の方が戦没されました。特攻戦で亡くなられた方々は、その内約8000人とも言われております。戦争末期の厳しい情勢下で実施された特攻作戦は、人類の歴史上でも、特別のものとして、世界中から注目されてきており、いろいろの見方がされております。そのような中で、戦後70年が過ぎ、関係した生存者が、激減してきています。焦りにも似た気持ちで、日々の活動を続けてまいりました。世の中は、「特攻物」と呼ばれる著作、ドラマ、演劇等が溢れています。いわゆる「反戦平和」の戦後風潮の中で、それらは、どうしても現代風の見方しかされてい

ないような気がして仕方がありません。それらから受ける印象は、「戦没隊員の真実の姿とは、何か違って

いるのではなか？」という疑問です。とは申せ、物事には表裏があり、多面的です。「真実」がどうであったかの究明は、もう極めて困難になってきております。それは、数少ない、残された実物から、自分自身で学んでいくしかないと思われま

す。その意味で、当会が昨年末に出版した『森丘哲四郎手記』は、一次資料であり、その大切さが窺えるのです。このような事業を通じて、真実を探求し、後世に残していく努力を継続していくしかないと思っております。どうか、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

このように、私達は、会の活動を継続していく上での「忠柱」となるものを、模索してまいりました。そして今、私が想っているそれは、次のとおりです。

『あなた達のご決し忘れません。有り難うございます。感謝します。私も負けないように努力します。どうか、安らかに！』

暑中お見舞い  
申し上げます

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者 慰霊団体協議会	公益財団法人 水交會	公益財団法人 偕行社
会長 島村宜伸	会長 藤田幸生	会長 志摩篤
理事長 柚木文夫	副会長 古庄幸一	理事長 富澤暉
専務理事 圓藤春喜	副理事長 齋藤隆保	副理事長 深山明敏
事務局長 岩田春朗	専務理事 赤星慶治	副理事長 白石一郎
	事務局長 本多宏隆	副理事長 大越兼行
		専務理事 小柳毫向
		事務局長 若木利博

航空自衛隊退職者団体 つばさ會	公益社団法人 隊友會	東郷神社 司福田勉
会長 吉田正	会長 藤縄祐爾	宮司 福田勉
副会長 外薊健一朗	理事長 先崎好平	東郷會 福田勉
副会長 片山隆仁	常務理事 増田好平	名譽會長 東久邇信彦
副會長 戸田眞一郎	常務理事 吉川榮治	副會長 友國八郎
副會長 溝口博伸	常務理事 外薊健一朗	兼理事長 田内浩
副會長 鹿股龍一	常務執行役 寺田和典	編集長 伊藤和雄
専務理事 長島修照	事務局長 植木美知男	事務局長 関秀充
	(総務担当)	

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰會
會長 杉山蕃
理事長 藤田幸生
副理事長 岩崎茂
専務理事 衣笠陽雄
事務局長 石井光政



オープニング (リンゴの歌)



左よりあべ静江・九重佑三子・田辺靖雄・合田道人

見舞われ、夕刻18時からの第一夜祭齋行の時刻となつても降り止まなかつた。しかし、天候に関わりなく祭儀は執り行われ、驟雨にけむる御本殿の偉容は、ライトアップされて愈々神々しく、御紋章は金色に輝いていた。徳川康久宮司以下大勢の神官が御奉仕する諸神儀を終え、参列者一同御本殿に昇殿して拝礼し、第一夜祭は滞りなく終了した。次いで、能楽堂において、例年、み

たままつり奉納芸能祭のメインイベントとも言える、一般財団法人日本歌手協会の「奉納歌謡ショー」が開催された。雷雨のため開催が危ぶまれたが、能楽堂前の露天の見所には、激しい雷雨にも拘わらず、2時間も前からびしょ濡れになりながら開演を待ち兼ねる観客もいて、15分後の19時15分からの開演となつた。雨に濡れながらも常時二、三百名の観客で、会場は熱気に溢れていた。それに応えて、新人・ベテラン共に非常に想いの籠もつた熱唱を演じ、素晴らしい奉納歌謡ショーであつた。

日本歌手協会は、今年設立54周年を迎えたが、設立以来長年にわたり靖國神社みたままつりの奉納歌謡ショーを有志により奉仕してきた。現会長は、昭和20年生まれ歌手田辺靖雄で、名

譽會長はベギー葉山である。司會は、理事で歌手でもあるあべ静江と同じく理事で歌手でもあり、構成演出担当の合田道人。今年のテーマは、「みたままつり70

回、平和と共に歩いてきた道に感謝して”である。

第1景のオープニングは、全員で戦後のヒット曲「リンゴの歌」を歌い、第2景は、戦後の風が吹いて来ると題して、あべ静江が「青い山脈」を、ポニージャックスが「長崎の鐘」を、宮路オサムが「夜のプラットホーム」をそれぞれ歌った後、第3景は、みたまよ、安らかにと題して、ペギー葉山が「空の神兵」と「南国土佐を後にして」を、静太郎が「南十字星の下で」を、浜より子が「あ、特攻の母」を熱唱し、こまどり姉妹が「九段の母」と「崖壁の母」を哀調を籠めて歌い上げた。第4景は、「心の歌・唱歌が聞こえる」と題して、ポニージャックスが「わか

## 第33回宮崎特攻基地慰霊祭に参列して

理事 石井 光政

平成28年4月3日(日)に執り行われた「第33回宮崎特攻基地慰霊祭」に大穂園井評議員と共に顕彰会代表として初めて参列(今までは供花のみ)しましたので、その概要と所見を報告します。

ば」を、司会者で、作詞家でもある合田道人が「僕は唱歌が下手でした」を心を籠めて歌い、第5景の「平和への感謝」では、大津美子が「ここに幸あり」と「夜空に光るあの星よ」を、佳山明生が「花(すべての人の心に花を)」と「氷雨」を歌い、第6景の「幸せのひとこま」では、会長の田辺靖雄が「お

れでよければ」を、その夫人の九重佑三子が「ウエディング・ドレス」を、夫妻で「夢であいましょう」を息の合った見事なハーモニーで歌い上げた。次いで、第7景の「みたままつりが始まった」では、「みたままつり」の端緒となった、昭和21年7月14・15両日の長野県遺族連合会主催による奉納民謡・盆踊り大会に因み、民謡の大御所原田直之

### 1 慰霊祭の概要

平成28年4月3日(日) 11時から12時10分の間、宮崎特攻基地慰霊祭実行委員会(宮崎特攻基地慰霊奉賛会、赤江地域自治区協議会、宮崎市の三者合同・後藤徹夫会長)の主催で御遺族、来賓、奉賛会会員、一般等約220名の参列を得て、宮崎特攻基地慰霊祭が執り行われた。

慰霊碑が建立された昭和58(1983)年から毎年執り行われ、今回が第33回目(例年4月の第一日曜

が「木曾節」を、また、東日本大震災からの復興を祈念して「相馬盆踊歌」を熱唱した。第8景の「この人この一曲」では、あべ静江が「みずいろの手紙」、宮路オサムが「なみだの操」、こまどり姉妹が「ソーラン渡り鳥」、ペギー葉山が「学生時代」と、それぞれ懐かしのヒット曲を熱唱した。第9景の「フイナール」では、この8日に亡

くなった作詞家の永六輔さんへの哀悼の意も込めて全員で、聴衆も交え、「上を向いて歩こう」を斉唱して21時過ぎ、感動のうちに幕を閉じた。英霊もさぞ満足されたことであろう。終演近くには、雨も小降りとなり、正に涙雨であり、喜びと感激の雨でもあった。今年には境内外苑での露店の出店もな

日に実施される)である。

場所は現在の宮崎空港西端の外柵近くの旧海軍赤江飛行場(宮崎海軍航空隊)跡地に建立された宮崎特攻基地慰霊碑前である。

以下の式次第に沿って濟々かつ厳粛に執り行われた。

1開会の辞、2国歌斉唱並びに国旗掲揚、3黙とう、4追悼の辞(宮崎特攻基地慰霊祭実行委員会会長)、5慰霊のことは(宮崎市長、宮崎県議会議長、遺族代表)、6献花、7献詠、8

く、広々とした参道では、恒例の千代田区と千代田区体育協会主催の「納涼民謡のつどい」が大村益次郎銅像下で連夜開催され、勤め帰りのサラリーマンを含めてなかなかの盛況であった。

また、東京ねぶた連合会による青森ねぶたも、やや小振りながら、跳ね子も思い切り踊り跳ねて、本場の祭り気分が溢れていた。参詣者もそれらの祭りを楽しみながら、通行もスムーズに流れていた。

期間中遊就館内は夜9時まで開館されており、折柄特別展「大東亜戦争七十年展 最終章―今を生きるすべての人へ―」なども開催され、熱心に鑑賞する参詣者で遅くまで満員の盛況であった。(飯田 正能記)

特攻基地に学んで(赤江小学校卒業生代表・男女各1名による作文朗読)、9祭電披露、10吹奏楽演奏(赤江小学校吹奏楽部)、「おぼろ月夜」「ふるさと」、11閉会の辞。

### 2 所見

慰霊祭前日のNHKテレビで慰霊祭が実施される旨の放送が流れ、当日はテレビカメラも入るほど宮崎では特攻隊慰霊祭は市民の生活の一部になっていくという印象を受けた。

赤江海軍航空隊は昭和18年12月1日

に練習航空隊として現在の宮崎空港を中心とした周辺地区一帯に発足した。戦況の変化に伴い昭和19年8月1日から作戦航空基地として陸海軍の航空機がこの基地から発進していった。現在も掩体壕が空港周辺地区に残っており、赤江地区の住民が軍と一体となって戦争を遂行したことが伺える。

このような経緯から、赤江地区の人たちはこの基地から飛び立って亡くなった人達に強い慰霊の気持ちを抱いており、昭和55(1980)年に宮崎特攻基地慰靈碑奉賛会が発足し、昭和



慰靈碑



慰靈祭場



半旗の国旗と海軍旗

58(1983)年に慰靈碑を建立、爾後、慰靈祭を執り行っている。これは教育にも影響し、赤江小学校の生徒は課外活動の一環として6年生になると慰靈碑を見学し、知覧等を修学旅行で訪問、更に特攻基地を題材とした劇を行っている。今回の慰靈祭でもこの子供たちが体験を基にした作文

を発表し、その中で「春の遠足で慰靈碑を実際に見て、考えていたものと違う重たい思いがした。戦争で亡くなられた方々に対する感謝の念が出た。知覧で写真を見たが出撃前に何で笑顔でいられるのだろうか、胸が苦しくなってきた。戦争の悲惨さを学ぶとともに、今の日本の平和は誰のお陰か考えた。」

等の想いを抱いたことを語っていた。この子供たちは祖国日本を愛する立派な日本人に成長するだろうと頼もしく思え、他の学校でもこのような素晴らしい教育を行えないものだろうかと感じた次第である。

慰靈碑は特攻隊で散華された海軍の銀河特攻機47機(140名)のみでなく、ここから飛び立って亡くなった陸海軍の搭乗員605名も祭られている。また、碑文には宮崎空襲で亡くなられた民間人123名の御霊の鎮魂と民間航空の殉職者の御霊を合祀していると記述されている。

慰靈祭の最後は、赤江小学校吹奏楽部による「おぼる月夜」と「ふるさと」が演奏され、「ふるさと」を全員で合唱して散会となった。

慰靈碑の傍らには国旗と海軍旗のポールがあり、毎日掲揚されているが、当日は半旗になっていたのが印象的であった。

## 第45回萬世特攻慰靈碑慰靈祭に参列して

評議員 片山幸太郎

### 一 はじめに

平成28年4月10日(日)に執行され

た第45回萬世特攻慰靈碑慰靈祭に参列しましたので報告いたします。

苗村七郎著『陸軍最後の特攻基地 万世特攻隊員の遺書・遺影』の初版が平成5年8月10日に刊行されましたが、小生は当時同書を読んで大変感銘を受けておりましたし、万世特攻平和祈念館を訪問したこともありまし

また、会報『特攻』第101号38ページに、新刊図書として紹介されている

清武英利氏の著書も読みましたが、その中に描かれている苗村氏の万世特攻平和祈念館等建設に至る八面六臂の活躍についても認識をしておりました。なお、同書はライター取材による情報に基づき構成した内容のものであ

り、前記の苗村氏ご自身による著書ほどの臨場感を感じさせるものではない

かもしれませんが、小生は読後にやや不完全燃焼感を覚えていたところでした。とは言え、同書は、万世のことを更に知りたい、と読者に思っていたためだけの良い切っ掛けになるであろうという意味では非常に有効なレポート

であったと思います。このように複雑な思いが交錯していたところに、慰霊祭参列の機会があり、正に我が意を得たという想いで参列させていただきました。以下に当日の慰霊祭祭について  
の所見を申し述べます。

## 二 所見

### 1 慰霊祭

当日は朝から雨天であり、慰霊祭終了後1時間ほどしてようやく雨は上がりました。

10時25分、会場の上空を鹿屋基地からの慰霊飛行の通過がありました。

次いで10時30分から御遺族の紹介、旧隊員（戦友会）・参加部隊長等・参加各団体・第12普通科連隊音楽隊12名などの紹介に続き、開会挨拶、国旗掲揚、黙祷、奉賛会会長の辞、遺族代表挨拶、旧隊員代表による慰霊の言葉、献詠、約300名の参列者全員による献花、第12普通科連隊音楽隊による「國の鎮め」の演奏、加世田高校在校生代表の辞、国旗降納の順で続き、11時45分、慰霊祭は整齊と終了しました。

### 2 万世特攻平和祈念館

昭和47年、萬世陸軍飛行場跡地の一角に萬世特攻慰霊碑「よろずよに」が建立され、更に平成5年、万世特攻平和祈念館が開館しました。館内2階に

展示してある萬世陸軍飛行場衛門の表札板（創意復元したもの（写真①））には「万世」ではなく、「萬世」と書かれており、「ばんせい」と読むものは今も昔も変わらないようです。

### 3 慰霊祭会場周辺の様子

かつての萬世陸軍飛行場は、鹿兒島県南さつま市（加世田市と万世町が合併）にあり、現在は鹿兒島県立吹上浜公園になっていて、雨のせいか人影はまばらでした。

特攻隊員が出撃前に参拝したという竹屋神社（慰霊祭会場から車で数分程の所にある（写真②））を、慰霊祭後に訪れましたが、その頃には雨も上がり、お参りの後、神社に隣接する笠狭宮（かささのみや）の跡も散策することができました。ここが皇祖生誕の地であると伝えられていることを今回初めて知りました。竹屋神社が菊の御紋章を掲げている訳は、その由来によるものと思われれます。広い敷地の奥の丘

陵頂上には、磐境（いわさか）という古来信仰の対象となっている岩石（写真③）があり、鬱蒼としたその場所は霊験を感じさせるほどの静寂感に包まれていました。

## 三 おわりに

新潮文庫発刊の神坂次郎氏著『今日われ生きてあり』の文庫本（平成5年7月25日発行）の178〜187ページ（第14話 背中の静ちゃん）の逸話の部分は、万世から特攻出撃をした一人の伍長の日記や手紙を主体に記載されたものなのですが、これについては、同書の著者である作家が類似の資料を活用し、物語としての創作活動を行ったものと考えられる・・・との疑問が世間では蔓延・定着しています。この件に関して真偽の程は分かりませんが、ことほど左様に文書や本になつたものが全て当時の真実を物語るものではないのであって、具体性のある真理を感じるためには、自らが現地足運を運び、耳をそばだて、空気に触れ、そしてその場を直接見るのが、少しでも真実に近づいたための手段なのではないかと思料します。

この度は、万世を訪れる機会（約10年振り2度目）を得て、新たな想いを記憶に留めることができ、萬世特攻

慰霊碑慰霊祭に、当顕彰会の会員を参列させる会の事業に対して大いに感謝している次第です。



②竹屋神社 拝殿



③磐境（いわさか）

## 第57回出水市特攻碑慰霊祭に参列して

理事 石井 光政

平成28年4月16日、鹿兒島県出水市で執り行われた出水市特攻碑慰霊祭に参列しましたので報告します。

### 1 慰霊祭の概要

慰霊祭は、出水市内の旧海軍出水航



①旧萬世飛行場衛門表札（復元）



「特攻碑 雲の墓標」

空隊跡の地下防空壕の上に建立されている「特攻碑 雲の墓標」前で執り行われた。出水市の「特攻碑 雲の墓標」は昭和35年4月16日に建立され、除幕式と第1回慰霊祭が執り行われ、以降毎年4月16日を慰霊祭の日と決めて斎行されている。出水市の慰霊祭は、前日の夕刻に慰霊祭参加者のうち希望者が前夜懇親会を行うが、今回も特攻碑顕彰会の会長である市長が公務で欠席したものの、副市長以下40名ほどが参加し、情報交換を行うとともに懇親を深めた。

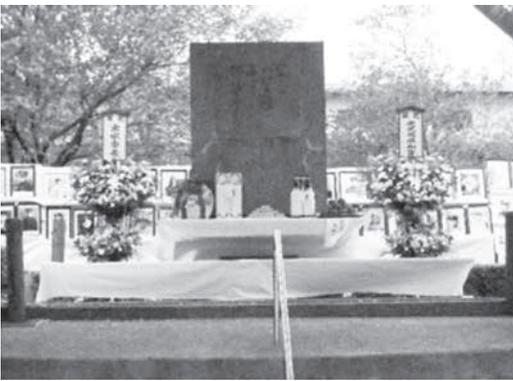
当日は14日からの熊本地方を襲った大地震の影響で開催が危ぶまれ複数名が交通途絶のため参加できなかつたものの、慰霊祭には250名ほどが参列し、慰霊祭開始10分前の10時50分に、鹿屋基地から飛び立ったP-3C1機が頭上を慰霊飛行し、予定時刻の11時、陸自国分駐屯地音楽部の君が代演奏と儀仗隊の捧げ銃で、市の消防団幹部に

より国旗と海軍旗が掲揚され、予定通り慰霊祭が開始された。

慰霊祭は戦没戦士の御霊に対する黙祷の後、まず、指名供花（我が顕彰会は会長、ご遺族代表に続き3番目）を行なった。次に特攻碑顕彰会会長（出水市長 渋谷俊彦氏）と御遺族代表による慰霊のことは、陸上自衛隊国分駐屯地の儀仗隊による捧げ銃と音楽隊による奉納演奏、千羽鶴奉納、居合道の献武、参加者全員の献花と同期の桜の斉唱の後、国旗と軍艦旗を降下し12時30分、慰霊祭は終了となった。

## 2 所見

この慰霊祭は前日夜に懇親会が行わ



慰霊祭祭壇

れるのが特長で、今回も15日の夜6時から出水市副市長以下、翌日の慰霊祭参加者のうち40名近くが集まって懇親を深めるとともに、特攻で亡くなった方のお話や、我が顕彰会が発行した「森丘哲四郎日記」等に関する情報交換・発信等を行うことができた。

出水市は戦争体験者1000名の聞き取り調査を行っており、現在85名までを終了し、鋭意継続中とのこと。幅広い情報交換の必要性を感じた。

翌日の慰霊祭は、熊本地方を襲った大地震の余波が緊急地震速報が鳴っていたが、天候には恵まれ、市長が会長を兼ねているため、市役所職員が準備から撤収まで全てを取り仕切ってお



儀仗隊

り、進行もスムーズに行われた。

また、鹿屋の海上自衛隊と国分の陸上自衛隊も協力し、P-3Cの慰霊飛行に始まり、音楽隊の演奏、国旗、海軍旗の掲揚・降下時の儀仗隊の支援等、自衛隊の協力が重要な位置を占めていた。

慰霊碑は作家「阿川弘之」氏の「雲の墓標」からの「雲こそわが墓標、落暉よ碑銘をかざれ」が表に、裏には「吾らに代わりて、代わりなき若き命を南海の千尋の底に沈めし若き勇士達よ、今日よりは安らげく眠れ」が刻まれている。

慰霊碑の場所は、保存されている地下防空壕の上に「陸攻銀河隊 出撃の地」の碑と共に建てられている。地下防空壕は自由に入入りでき、中には練習機赤とんぼの尾翼の一部や銀河の機首部分の一部（撃たれた弾痕が生々しい）も展示されており、当時の厳しい戦いの一端を知ることができた。

慰霊祭当日は、慰霊碑の周りは花で飾られ、亡くなった隊員の顔写真も置かれ、我々はそれに向かって慰霊祭を行うため、正に英霊と向き合い共に過ごしたひと時であった。慰霊碑の裏の文にあるように、正に代わりなき若い命を懸けて今の日本を作った下さつた英霊の皆様へ感謝の念を深くする印象深い慰霊祭であった。

## 第49回「戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭」に参列して

会員 原 知崇

大東亜戦争末期の昭和20年4月、天一号作戦により陸海航空特攻隊の大規模作戦に時を合わせ、海上特攻隊として沖縄方面に出撃した第二艦隊は、米艦載機の猛攻を受けた。伊藤整一司令長官以下3700名の将兵が散華され、戦艦大和、巡洋艦矢矧、駆逐艦4隻が失われた。

奄美群島の一つ、徳之島。特別攻撃隊が使用した浅間陸軍飛行場跡があるものの、海軍にゆかりの施設は耳にしない離島である。しかし、この島の犬



田布岬には、海に向かって聳える塔があり、海青く、空眩しい南国の天然を重々しい灰色に切り取っている。その中ほどには、高松宮宣仁親王殿下の御揮毫になる「戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊塔」の文字が望め、塔の存在感を更に際立たせている。塔の高さは大和の艦橋と同じ高さだそうだ。

第二艦隊の慰霊碑がこの島にある由来は、戦艦大和の副電測士であった吉田満氏の著書『戦艦大和ノ最期』に徳之島西方海上において大和が撃沈されたと記述されたことによる。時を経ての詳細な調査で、大和の沈没地点は長崎県男女群島女島南方と結論されたが、不思議とこの碑の前に立つと、眼前の海原を往く海軍最後の艦隊の旗の



風を今ここに聴いているかのように厳肅な気持ちになる。

更にこの慰霊塔の先の岩場には、もう一つの鎮魂の像がある。こちらは彫刻家中村晋也氏の手になる像で、黝い幾つかの顔が水中を漂う銅索のようなものに絡め取られている姿だ。これを見ると、従容自若としてその運命を受け入れ、海中に没した第二艦隊乗員の心中を思わずにはいられなかった。

慰霊祭は伊仙町が主催するもので、71年前、坊ノ岬沖海戦が行われたのと同じ4月7日の13時30分から慰霊塔の前で執り行われた。御遺族を始めとして多数の参列者が見守る中で、国旗・軍



艦旗が掲揚された。高齢化で参列される御遺族は少なくなっているが、伊仙町長の「今後もこの慰霊祭は守り続けていく」という言葉に、大変力強いものを感じた。離島の目まぐるしく変わる天気の中、伊仙町の皆様の心尽くしの慰霊祭は、美しい景色と供花に彩られて進行した。14時23分、大和沈没の時に合わせて一同黙祷、打ち寄せる波

の音の中、英霊よ安かれとお祈りした。今年呉市が、大和の沈没海域で、無人探査機による鮮明なハイビジョン撮影を実施した。貴重な戦艦大和の水中映像は、7月23日から呉市海事歴史科学館で一般公開されるそうである。



平成28年度秋田県特攻勇士之像慰霊祭及び第25回秋田県特別攻撃隊招魂祭に参列して

専務理事 衣笠 陽雄

一 慰霊祭の状況

1 平成28年度秋田県特攻勇士之像慰霊祭の概要

平成28年4月28日、秋田県能代市の能代八幡神社・特攻勇士之像前において、平成28年度秋田県特攻勇士之像慰霊祭が執り行われた。能代八幡神社は、



秋田県・能代八幡神社



秋田県・特攻勇士之像慰霊祭(代表 武田安一氏・陸士60期)



東雲飛行場慰霊碑



義烈空挺隊副隊長渡部利夫大尉の墓碑

の状況について説明を受けた。

なお、秋田空港からの途上、昭和20年5月24日、沖縄中飛行場に突入し、散華された義烈空挺隊副隊長渡部利夫大尉(戦死後中佐・陸士55期)の実家に立ち寄り、硫黄島で戦死された長兄由夫氏と共に刻銘されている立派な墓

秋田空港から車で1時間半、県北部の能代市の中心部、柳町に位置し、奈良時代の658年、阿倍比羅夫が蝦夷征伐のため能代を訪れた際に創建したと伝えられる由緒ある神社である。

特攻勇士之像は、平成20年、本殿右側に、東雲飛行場慰霊碑と並んで建立され、28柱を祀っている。台座には、大きな「留魂」の金色文字が鮮やかに刻まれているのが印象的であった。

慰霊祭は、冷たい雨が降る中で、準備されたテント内に十数名が参列し、代表の武田安一氏(陸士60期)により斎行された。神事は、八幡神社宮司により執り行われ、修祓・降神・献饌の

儀、祝詞奏上、東雲飛行場での殉職者及び特攻出撃戦死者の御祭神名奉読の後、参列者全員の玉串奉奠・拝礼、撤饌・昇神の儀、国歌斉唱、閉式の辞と続き、最後に武田氏の御礼の御挨拶で滞りなく終了した。短時間ながらも厳粛な雰囲気の中で慰霊祭であった。

その後、直会が、特攻隊員も使用したという料亭「都」で催された。武田氏の司会で、参加者全員の紹介と戦争体験・現在の心境等について全員の発言があり、大変参考になった。筆者にも当顕彰会の話をお願いされたので、特攻勇士之像の慰霊祭継続についての御礼、当顕彰会の主要事業の紹介、今

後の特攻勇士之像の慰霊祭・維持管理についてのお願ひ等に関して話をさせていただいた。武田氏からは、東雲飛行場急降下訓練殉職事故や若杉是俊少尉(戦死後大尉・航士57期・殉義隊・昭和19年12月21日ミンドロ島沖にて特攻戦死)の日記抄についての説明があった。また、戦時中飛行場付近に住んでおられた高齢の御婦人から飛行場での殉職者の火葬の話があり、若い女性の現職教員からは、近現代史を教えなければならぬが、戦争について何も知らないのでは実態の把握にきた等々興味ある話を聞かせていただいた。

直会后、武田氏の案内で東雲飛行場跡地及び旧慰霊碑を巡り、現地で当時の

碑にお参りした。

## 2 第25回秋田県特別攻撃隊招魂祭の概要

平成28年4月29日、秋田県総社神社において、雨模様様の肌寒い中、「第25回秋田県特別攻撃隊招魂祭」が百名近い関係者の参列を得て執り行われた。

この招魂祭は、元海軍特別攻撃隊員であった舛谷健夫氏（ツバサ広業初代社長・現会長）が、私財を投じて平成4年に建立した「特別攻撃隊忠魂之碑」の除幕式以来連綿と続いているものである。忠魂之碑の横には「特攻隊写真碑」があり、英霊全員が見守る中での招魂祭となっている。祭典は、招魂祭実行委員会（山本高敬委員長）の主催で行われた。開式の辞、昭和天皇武蔵野御陵遙拝、国歌斉唱、黙祷の後、祭主の総社神社川尻宮司により神事が行われた。修祓、降神、祭主祭詞奏上の後、立派に設置された舞台上で、雅楽奉奏の下に、2名の巫女による御神楽



秋田県・総社神社の特別攻撃隊忠魂之碑



特別攻撃隊招魂祭の御神楽「浦安の舞」奉奏

「浦安の舞」が奉奏された。地方でのこの種慰霊祭で御神楽が奉奏されるのは極めて珍しい。その優雅で華麗な舞は、参列者の心と共に英霊のもとに届いたのではと思われ、印象に残るものであった。続いて、元海軍夜間戦闘機「月光」のパイロットであった藤本光男氏（91歳）から追悼の言葉があった。その語りは、独特の語り掛け口調と内容として死について特攻隊員への悼みを述べられ、参列者に深い感銘を与えた。次いで、秋田県特別攻撃隊英霊56柱の御祭神名の奉読と山本実行委員長による大西瀧治郎中将の遺書の朗読があった。暗証で朗々と述べられ、特攻

を命じた指揮官の気持が散華された隊員に十分届いたものと思われた。次にハーモニカの伴奏の下、玉串奉奠・拝礼が行われた。元回天隊員竹林博氏、黄文雄氏、川村純彦氏、梅原克彦氏、当顕彰会代表として専務理事の筆者と及川昌彦評議員、秋田県郷友連盟、空挺同志会等の方々玉串を奉奠して拝礼した。その後、撤饌、昇神の儀で神事は終了した。

次いで、川尻宮司から御礼の言葉が述べられた。その中で、本招魂祭の状況について「・・・戦後、元特攻隊員で現ツバサ広業会長の舛谷健夫氏が、復員後、特攻隊員の慰霊・顕彰をした」と本神社に來られた。しかし、戦後の混乱期で、国・県がそのような動きを見せないことから、自ら資産を投じて顕彰碑等の建立、慰霊祭の執行、秋田県出身の特攻隊員名簿の作成等献身的な活動をされた。最近が高齢のため参列されていないが、長男の政雄さんや御遺族、心ある若い人達が参列されて、25年間続けてきた。戦後71年を過ぎたが特攻隊についての正しい理解がなされず、また、天皇陛下の靖國神社御親拝も実現していない。特攻隊は国難中の国難に当たって国・民族・家族を救うことだけを願って逝ったのである。英霊の行動を考へる時、我々はこれ

で良いのかと考えさせられるものである。この慰霊祭は、以前から戦友・御遺族を中心としたものであるが、高齢化で心配していたところ、若い人達が慰霊祭の意義を理解し、各地から参列してくるようになった。・・・また、今回節目の25周年に当たり、境内に、秋田県出身の特攻隊戦没者数と同じ56本の紅山桜を記念に植樹します。また、元特攻隊員の川崎政文氏作詞、陸上自衛隊音楽隊の古沢誠一氏作曲の『招魂祭賛歌』を作成しました。特に4番・5番は心の籠った歌詞（後掲）となっている。次回までに皆様の前で発表できるように準備します。・・・との紹介があった。

次いで、舛谷政雄氏（現ツバサ広業社長）が挨拶され、参列者へのお礼と今後とも本慰霊祭を継続していくとの強い決意が述べられた。続いて「聖寿万歳」の三唱とハーモニカの伴奏による「海ゆかば」の二回斉唱があつて、閉式となった。その後、代表者により記念植樹が行われた。

### 招魂祭賛歌（4番・5番）

四 櫻の杜に 響かせて

歌う君が代 祭文は

愛する国に 殉じたる

若き御霊に 呼びかける

枯れし眼に 涙湧く

五 万葉の桜 咲き競う

総社の境内は 今盛る

老いも若きも 日ノ本の

弥栄願い 胸を張り

君集いこよ 手を繋げ

## 二 所見（総社神社での招魂祭について）

全国各地での特攻隊関連の慰霊祭のやり方は、私の知る限り、大同小異、全国ほぼ同様である。

本招魂祭については、今回参列した限りでは、「英霊が満足されるかどうか」の視点に立つて行われたような内容で、他の慰霊祭とは一味違う印象を持ったし、色々と考えさせられた。式次第の一つ一つが英霊を考え、現地現物と一体化されているように見受けられたが、それは「総社神社」という場、「招魂祭」という名前を始めとして、式次第の内容や建立された碑・付属施設が、元特攻隊員の舛谷健夫氏個人の信念、考え方から出発したからであって、政治的・宗教的な問題は余り考慮することなく、自由な発想で事業が進んだからだろうと思う。その具体的な内容を説明すると、開式の辞の後、「昭和天皇武蔵野御陵遙拝」「国歌斉唱（二斉唱）」、後半の「聖寿万歳」は、当時

の特攻隊員が崇拜した天皇陛下を崇め、国歌も二回歌うのは、英霊の気持ちを思つてのためである。「神前御神楽奉奏」は、立派な舞台が、特攻隊員の写真が飾られた写真碑に正対して設けられ、特攻隊員の直ぐ前で、あたかも特攻隊員に御神楽を奏せよというようになっている。

「追悼文朗読」は、かつての特攻隊員の戦友が、語り掛けるような口調で述べられ、碑に御英霊が集まって会話をしているような錯覚に捉われた。

次いで「英霊56柱の御祭神名奉読」があったが、写真碑の中から返事がするようないきがして、思わず写真に目を移した。ただ、何百柱もの御祭神を抱える慰霊祭では個々の呼称は難しいであろうが、続いて「大西瀧治郎中将遺書朗読」では、朗々と遺書を暗唱し、特攻を命じた指揮官の慙愧の気持ちや、自決に当たっては特攻隊員と同様の苦しみを味わおうと介錯を拒否して7時間余も苦しみながら従容として死に就いた中将の行為と心情は、散華された特攻隊員に十分届いたであろうと確信できた。このような内容は、毎回参列している参列者には余り強い印象は無いかもしれないが、祭祀全般が特攻隊員を中心に動いているのであり、これこそ英霊奉慰の一つの理想的な形

ではないかと感じた次第である。現在行われている全国の慰霊祭は、ほとんど非政治的・無宗教が通常となつて、生きていた者が勝手に決めていたが、「語る」ことを放棄させられた英霊の気持ちなどをどのように汲み取り、具現したら良いのか、この問題が慰霊祭執行の原点ではないだろうか。祀られる側の事情など無視されての慰霊・顕彰では、英霊も浮かばれないだろう。慰霊祭の使命には、「祀られている英霊に對する永遠の慰霊・追悼の気持ちの表明」と「世の中に対する英霊の精神の継承」の二面がある。現在行われている慰霊祭のほとんどは、前者偏重である。特攻隊・特攻隊員がマスコミ等で取り上げられることはほとんど無くなりつつある現状で、各地の慰霊祭が、今後継続できるかどうかは、追悼だけでなく、顕彰についても考え、若い人達に伝えられ、継承されるかどうかにかかっていると思う。

本招魂祭が、非常に印象的であり、今後の慰霊祭の在り方を示唆している。述べたが、本招魂祭が私的な、かつ個人が立ち上げた慰霊祭であるが故にできることで、公的な慰霊祭では難しいのかもしれない。ただ、神式・仏式いずれも儀式の順序は決まっており、変える必要はないし、淡々と儀式を進

めるだけで、一人でも心に感じる参列者がおれば、慰霊祭は成功なのかもしれない。しかし、参列者を増やすためには、主催者側の創意工夫も重要である。例えば、最近の世田谷山観音寺の年次法要では、神仏習合方式での儀式を執り行っており、仏式・神式の垣根に捉われずに参列でき、効果を上げていた。慰霊祭では、企画する側は、「慰霊・追悼要領が、英霊を中心に、英霊が喜ばれるかどうかという観点、気持ちで祭儀を企画・実行すること」、参列する側は、「英霊が満足されたかどうか、察することができるような清らかな白紙の心で参列すること」が大事ではないだろうか。これは、特攻隊員の慰霊・追悼―心安らかに眠りくださいとの願いの範疇であり、我々は更にもう一つの、特攻隊・特攻隊員の行動の顕彰―精神の継承という大きな使命があることも忘れてはならないのである。

今後の慰霊祭に当たっては、以上のような気持ち・心構えを持って、企画し、参列していききたいと思う。

## 平成28年度・第62回知覧特攻 基地戦没者慰霊祭に参加して

理事 岩崎 茂

平成28年5月3日、知覧特攻基地戦没者慰霊祭に当会代表として、倉形会員と2名で参列した。この慰霊祭は、今年で62回目という、実に長きにわたって行われている。例年全国各地から御遺族の方々、関係者等約1千名が参列されるようであるが、当日は生憎の悪天候に見舞われてしまった。

それでも約8百名の方々で参列された。私も倉形会員も初めての参列である。ところで、当日はこの季節としては珍しく台風並みの暴風雨となり、参列された御遺族や戦友の方々は、かなり高齢の方もいらっしゃるの、さぞかし難儀されたことと思う。

鹿児島空港（元海軍第二国分基地）に降り立った瞬間、それは沖繩に対する陸海軍航空特攻作戦の、正に根拠地に足を踏み入れたのだという感動を覚えた。

知覧への移動中、桜島を望見することはできたが、残念ながら出撃する特攻隊員たちが最後に目にしたであろう開聞岳は、雲に覆われて姿を現さなかった。

知覧到着後、受付開始まで時間があつたので、三角兵舎（移動復元）、油脂庫、弾薬庫、給水塔、防火水槽等を見学して回った。時間の関係で、戦闘指揮所までは行くことができなかった。今では茶畑となり、当時の面影は全く無くなっているが、知覧飛行場の滑走路は、地面をローラーで平らに固める「転圧滑走路」であつた。大隈半島の鹿屋航空基地の北部に岩川という所があるが、ここには特攻を拒否した美濃部正海軍少佐の指揮する「芙蓉部隊」の秘密基地があつた。やはり「転圧滑走路」であつたが、偽装のため攻撃機の離発着時以外は家畜の牛を放ち、牧場に見せかけていたそうである。

知覧は幾度も空襲を受けたが、岩川の方々は幾度も空襲を受けたが、芙蓉部隊の秘密基地は一度も爆撃を受けてはいない。滑走路をカムフラージュするだけでこのような差があるとは。さて、周辺の見学を終えて受付場所へ向かった。受付は、慰霊祭式典会場である特攻平和観音堂前と、特攻平和会館に隣接した地元の体育館で行われており、館内では大勢の地元のご婦人が、参列者への軽食や湯茶等の配布、給仕など、とても親切な接遇をしてくださつていた。

また、戦友同士の方々であろうか、椅子に座つて、或いは立ち話で朗らかに談笑されていた。「同じ釜の飯を食う」という表現があるが、やはり軍人同士は起居を共にし、厳しい教育訓練に明け暮れ、実戦に向かい合つては生死を懸けるのも一緒というような経験をされてきたが故に「強い絆」で結ばれるのだと思う。戦友同士の微笑ましい光景を目の当たりにし、ふと「絆」という言葉が浮かんだのである。幸いなことに実戦こそ経験はしていないが、自衛官同士も同じように「絆」がある。しかしながら、戦後70年以上経過している事実を考えると、この「絆」の強さには感動を禁じ得ない。

土砂降りの雨は一向に止まず、式典会場へ移動するにも近距離とは言え、膝から下は濡れとなった。慰霊祭式典会場は、正面に特攻平和観音堂を望むように設営された天幕内であつた。ほとんどの関連作業は、慰霊祭主催の知覧特攻慰霊顕彰会の方々が実施されたようだ。前述のご婦人方や、この事は、当会の主催する今後の行事運営に際しても、その方策と関わり方について大変参考となった。

慰霊祭は、地元が知覧茶で有名ということもあり、開式の辞と小笠原流日本礼道会員による「献茶」に始まり、参列者全員による黙祷、読経、焼香と続いた。その後、南九州市議会議長、

鹿児島県議会議員が「追悼の言葉」を述べられた。続いて「慰霊の言葉」を御遺族代表、少飛会代表、特操一期生会代表の方々が述べられた。

ここで、大変不思議な事が起こつたのである。少飛会代表、特操一期生会代表の方々が魂の籠もつた言葉を述べられている、正しくその時に、あれ程荒れていた暴風雨が治まったのである。雨風の音が止み、慰霊祭式典会場には厳かな静寂が訪れた。「慰霊の言葉」が在天の御霊に届いたとしか思えず、非常に神々しく、感動した。

その後、献詠、参加者全員による献花、陸上自衛隊国分駐屯地音楽隊による献奏と続き、本慰霊祭主催者である知覧特攻慰霊顕彰会会長の塗木弘幸・南九州市長が、特攻隊戦没者への追悼の言葉を述べられた。

「特攻隊に関する史実を正しく後世に伝え、命の重さと平和の尊さを訴えていく」と。

引き続き参列者全員で「飛行第六十四戦隊歌（加藤隼戦闘隊）」、「同期の桜」を斉唱して閉式となった。約2時間にわたる慰霊祭であつたが、運営には主催の知覧特攻慰霊顕彰会が主体となり、近傍の自衛隊部隊すなわち陸上自衛隊国分駐屯地、海上自衛隊鹿屋航空基地及び鹿児島地方協力本部が

音楽隊派遣や慰霊飛行（今回は悪天候のため未実施）等多くの支援により、整齊と実施されていた。

当会においても、その行事に際して有志の現職自衛官が何名か作業支援に来てくれているが、もう少しなりとも組織力を活かした支援があればな、と個人的にはそう思う。

参列者は、特に御遺族や戦友の方々はさすがに高齢化が進み、誠に失礼ながらこの先何回参列できるのだろうかと感じたが、御遺族については「次の世代」に付き添われて参列された方や、また、若い世代であっても特攻に関する書籍等で感銘を受けた方々も多く来られていた。

特攻戦没者の慰霊を一世代で終わらせてしまうようなことがあれば、それこそ一大事である。好ましい形で世代交代をしていくことが最も大切であると思う。当会も、ご高齢の会員の方々がいらつしやる。その気高い意志を正しく継承していくために、望ましい形で世代交代するには質の良い会員、特に若い方々を募り、形式はともあれ、例えば、勉強会や懇談、会報等で正しく、そして丁寧に教育していくことが肝要である。このようにすれば、今後当会の慰霊顕彰活動も衰退をすることなく整齊と実施、継続していくことが

可能であると考える。

式典終了後、知覧特攻平和会館を訪れた。靖國神社にも遊就館があるが、地方の小さな施設で特攻隊員の遺書を読めるのは恐らくここだけであろう。しかも全て涙無くしては読めないものばかりである。遺品等及び特攻関連の資料等は良く整理されて充実しており、ほぼ誰にでも特攻に関する基礎的な知識は得ることができるようになっていた。特に、プロジェクトや液晶パネルによる知覧飛行場の沿革、航空特攻作戦に関する映像資料は実に分かりやすく作成され、日に何回か上映されており、一通り見れば「特攻」について理解できるように配慮しているのは好感が持てた。

当会の事務局にも所蔵の書籍が多数あり、史料価値が高いものも含まれているが、そういった書籍に限ってある程度予備知識が無いと容易に理解できない。その点、知覧特攻平和会館は、教育資料という視点から見ても実によく整備されていると感心した。当会も今後、所蔵資料等を改めて見直しを行うことにより、閲覧等が容易となるように整備・維持をしっかりと実施していきたい。

本会館には「語り部」の方が5人ほ

どいらつしやり、最初に特攻について

全般的なレクチャーを行った後、館内を説明案内して下さる。かつて予科練記念館「雄翔館」（土浦駐屯地・茨城）や市ヶ谷記念館（市ヶ谷駐屯地・東京）にも有名な「語り部」がいらつしやうたが、負けず劣らずの名調子で聞く者を感動させる。今回担当して下さった語り部は、当時旧制中学校3年生で、特攻隊員と交流のあった峯吉眞雄氏であった。

館内のエントランス・ホールに、ここを訪れた小中高校生が寄せた沢山の千羽鶴と添付のメッセージが飾られていたのには圧倒された。どれも平和を祈る内容であったが、宮崎県の一中学校のメッセージにふと目が止まった。そこには「日本を平和で素晴らしい国になる様に一所懸命勉強しますので私

たちを守ってください」と書かれていた。ハツとした。昨今は大人でもこのような発想は出来ないかもしれない。まだまだ日本も捨てたものではない。思わず山本五十六大將の「今の若いものなど口はばたきことは申間敷：」の一文を思い出した。在天の御霊はこの子供たちを必ずや守護してください。帰途につく前に「とこしえに（特攻兵像）像」と「特攻隊の母像」に

した。今回初めて知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列したが、その運営、特に管理事項等については、今後当会所掌の諸行事の企画、実施の上で参考となることが多かった。特に参列者（人）の動かし方（動線設定）、ご高齢の方々の適切なアシスト、案内（状況に応じて簡潔又は詳細）等である。また、平日頃から関係団体等と情報交換や連携を取り合い、互いに支援し合う強固な「絆」を構築しておくことも大切なことだと思ふ。

特攻平和会館については、展示品の説明の中に一部これまでの私たちとは異なる認識の説明、解釈が見受けられたが、今後双方で更なる調査と分析検討が必要であると考ええる。最終的には客観的で、かつ正確な「資料」を指さなくてはならない。

「悪天候を鎮める」きっかけを作ってくださった少飛会代表及び特操一期生会代表の方は「自分たちは高齢となったが生き残られた者の義務として戦友の御霊の慰霊を生涯継続していくことを誓う。在天の御霊よ安らかに眠れ。そして我らを護ってくれ」という主旨の詞を述べられた。この言葉は、我々が今後特攻戦没英霊の慰霊顕彰を継承していく上で、心、魂の拠り所と

すべきものではないだろうか。そう思う。

知覧特攻基地戦没者慰霊祭は、知覧特攻慰霊顕彰会、自衛隊等多くのの方々、また、地元の方々にも支えられた素晴らしい慰霊祭であった。色々と考えさせられ、学ぶ点も多かった。今後、特攻戦没者慰霊顕彰会の種々の活動をしていく上での資としたい。



特攻勇士の像「とこしえに」と筆者



特攻の母像

## 第62回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列して

会員 倉形 寛

平成28年5月3日、鹿児島県南鹿兒島市知覧町に所在する特攻平和観音堂の前において行われた「第62回知覧特攻基地戦没者慰霊祭」に参列した。

陸軍航空の特攻隊出撃基地としての知覧と知覧特攻隊戦没者慰霊祭については、これまであまりにも多くの方々が著述されており、またTV等でもかなり詳細な情報が流されているため、ここでは敢えて大幅に割愛させて頂く。

知覧特攻基地戦没者慰霊祭は、散華された特攻勇士の御霊を慰め、また我が国のみならず世界の恒久平和を祈念するため建立された「特攻平和観音像」を祈念の対象とするが故に仏式である。したがって、読経と焼香があるのが他のほとんどの慰霊祭の形式とは趣を異にしている。また、知覧特攻基地戦没者慰霊祭では焼香の他に、供花(献花・フローラル・トリビュート)が儀式の中に組み込まれている。

欧米では、戦没将兵の追悼(慰霊)式典においては基本的にキリスト教圏にあるため、フローラル・トリビュートが主流である。「永遠の眠りにつく

死者を慰めるため枕元に花を供える」というような精神的・宗教的なベースがあるからである。

そう考えると、知覧特攻基地戦没者慰霊祭の「供花」も確かに仏式ではあるが、非常に意義深いものがあると考えられる。

ここで話は変わるが、「フローラル・トリビュート」と言えば、私には生涯忘れ得ぬ体験がある。

平成15年の夏、当時埼玉県の入間基地に勤務していた私は、ある日突然に日米第五空軍からの依頼により横田基地所属の空軍将校35名を靖國神社参拝に引率、アシストすることになったのである。

当時、中国政府との間で種々の問題が持ち上がっていたため、当然私での参拝形式にするのかを米側に確認したところ、米第五空軍側からは「靖國神社には日本の戦没将兵が眠っている(祀られている)」と聞いている。祖国の危急存亡のときに臨み、命をかけて戦った勇士には最大限の敬意を表すのは当然のことである。靖國にはブルー(空軍正規の軍服)で行く。」との回答であった。

私は大変驚くと同時に、何か無性に嬉しかった。

さて、早速靖國神社の儀典担当部署

と調整し、米空軍将校団公式参拝の形式を計画した。米側の意見等も取り入れ、彼らも慣れている「リース・レイング・セレモニー(花輪による献花・フローラル・トリビュートの一形式)」と黙祷の形式とした。また、御手洗とお祓いも当然ながら進行の流れに取り込んだのである。

いよいよ当日、全く予行なしのぶつけ本番であったが、大社門前で二列縦隊に整列、花輪を持った二名の将校を先頭にゆつくりと進み、本殿前庭へ入る前にお祓いを受けた。

本殿前庭での儀式、特に「リース・レイング・セレモニー」と「敬礼」はとても感動した。かつての敵国の空軍将校たちが、我が日本の戦没将兵に対して慰霊を行ったのである。空軍の儀札刀と小銃等の武器こそ携行はしていなかったが、一糸乱れぬ「気を付け」と英霊に対する「挙手の敬礼」、そして「献花」は、軍人として最高の儀礼を尽くしたのではないか。

個人的には、いつの日か、知覧特攻基地戦没者慰霊祭をはじめ、全国の戦没者慰霊祭には米軍も参列して欲しいと思っている。欧米では歴史的激戦地等における年次追悼式や記念式典では、かつての敵同士であった両軍の生存将兵、その家族、遺族、現役将兵、



三角兵舎（復元）入り口



慰霊祭会場天幕内



三角兵舎内



慰霊祭会場天幕内

あるいは当事国の首脳等が参加している。バトール・オブ・ブリテン、ルマンデイ、パリ、そしてコヒマ、等が知られている。我が国では現在、硫黄島の慰霊行事のみであるが、アメリカ建国の歴史における三大激戦地でもある硫黄島に、日米両国の生存者、御遺族、現役兵が毎年集う様は、世界広しといえども他に例を見ない。

この靖國参拝の話には、更に付け加えておきたい不思議な事実がある。

米空軍将校団の靖國参拝の日より1週間ほど前、南方、ちょうどフィリピン近海で台風が発生し、日ごと本土に接近する動きを見せていた。当然のことながら東京の天候も悪い方向に推移していたのだ。週間天気予報では、運悪く当日は台風が関東地域を通過するため、雨と言うよりは強い風雨とのことであった。3日前から詳しい予報に切り替わったが、予報には変化なく、「強い風雨」。

この時点で、横田基地の空軍将校団に対し、当日台風の影響により強い風雨であれば、5時に靖國参拝の実施・中止を決心して連絡する旨を伝えた。

「当日の天候は大丈夫なのか？君はどう思う？」

「あなた方が軍服で行くのならば日本の勇士は皆喜ぶはず。多分晴れる。」

適当に回答したが、内心びくびくであったことは言うまでもない。

さて、いよいよ当日であるが、3時30分起床、まず、TVにより天気予報を見たが、東京は1日中風雨ということであった。外を確認すると風は確かに強い。ただ雨は前夜と比べると少しながら小降りになったように感じたため、5時に横田基地に連絡、「6時30分過ぎに横田基地に迎えに行くので全員将校クラブで待機」するよう伝えた。

電車は定刻どおり運行しており、6時30分に横田基地福生ゲートから入門、6時35分、将校クラブに到着した。

雨はパラパラ程度になっていったが、空は雲が厚くどんよりしていて、今にも雨がどつと降って来そうな様相であった。しかし、風が強く雲がどんどんと流れていた。

私は、正に「天佑神助」を信じて予定どおり米空軍将校団靖國神社参拝を実現すべく、GOの決心をして将校団35名と共に米軍の大型バスに乗車、7時に横田基地を出発、中央道を経て一路東京へと向かった。車中で靖國神社、戊辰の役、明治から以降の戦役・戦争についてレクチャーしたが、特に、靖國神社には他国の戦没将兵を慰める祠もあることや、武士道（サムライ・スピリット）については皆興味

深く聞き入っていた。

三鷹付近を通過する頃は、雨は完全に止み、さらに新宿の高層ビル群が望める頃には・・・、何と雲が切れ始め、幾つかの切れ間からは青空がのぞいて

いるではないか！  
全く不思議なことに、靖國神社に到着したその時には、雲一つない快晴となり、風もおさまり無風状態であった。さすがに米空軍将校団の面々も驚いていた。あの天気予報は一体何であったのだろうか？奇跡である。

素晴らしい青空の下、米第五空軍将校団35名の靖國神社参拝・日本陸海軍戦没将兵慰霊式典は、予定どおり、しかも完璧に実施、終了することができた。私は改めて「天佑神助」と「戦没将兵英霊の御加護」に深く感謝を捧げた次第である。

話を知覧に戻す。

残念ながら、この度の知覧特攻基地戦没者慰霊祭においては、前述のような「奇跡」の再現はなく、終始大雨と強風の中、天幕内で式典が実施された。

「第一世代」としての御遺族も高齢化が進み、特に遠方からはるばると慰霊祭参列のためにいらっしゃる方々は、さぞかし大変なことと思う。「次世代」以降は、もちろん慰霊祭に参列する等、「形式的」な慰霊行為を継承していく

事は大切なことであると認識しているが、最も大切なことは、戦没者を、それが軍人であれ軍属であれ一般民間人であれ、我々が決して忘れないということではなかるるか。

慰霊式典における式辞や慰霊のことばは、ほぼ「命の尊さ」と「平和の大切さ」、そして「戦争は二度としない」という「キー・ワード」で纏められている。今回の慰霊祭においても少飛出身の方と特操一期出身の方を除き、同様にそのとおり正しく聞こえるのだが、果たしてどうだろうか？

自分の家族の生命、そして日本国民の生命が尊いから何としても守らなければならない。自分の家族の平和、そして日本国民の平和が大切だから永遠に続くように守らなければならない。ならばそれらが犯されようとした時、これを阻止すべく起ち上がり、身を挺して戦い、自分の生命を投げ打つても戦って戦って守り抜かなければならないのではないか。

確かに「不戦の誓い」は、それはそれで当たり前で正しいように聞こえるが、人々の生命や国の平和は、単に祈っていれば守られるものでは絶対ない。不幸にして困難な状況に直面した際には、戦って守り抜き、勝ち取るもの

である。だからこそ、特攻隊員を含む多くの戦没将兵の方々は、最後まで戦い抜いて下さったのではないか。

我々は、昨今の国際情勢や日本の国に関わる安全保障上の危機を正しく認識し、厳しい現実目覚めなければならぬと思うのである。さて、果たして自分としては何ができるか。

そうでなければ、戦没将兵の方々と生き残りの方々が生命を懸けて戦い抜いて遺してくださった「日本」に対して申し訳ない。慰霊祭においては、「不戦を誓う」のではなく、「万が一困難に直面するような事態となったその時、最後まで日本を守り抜く、いや、祖国日本と同然の愛する人々を守り抜く誓い」をすべきではなかるるか。

今回、第62回知覧特攻基地戦没者慰霊祭に参列したことにより、米空軍将校団の靖國神社参拝を想い出した。そして更に、彼らと互いの戦没者に対する慰霊、追悼、そして顕彰についていろいろな意見交換をした事を改めて思い起こし、今後の自分の戦没者に対するあるべき姿勢と態度について深く考える動機となった。

その貴重な機会を与えて下さった特攻戦没者慰霊顕彰会と、現地でお世話になった知覧特攻慰霊顕彰会の方々に、深く感謝申し上げます。

制服を着て35年間、戦没者の御遺志を継いで空の防人であったことを大変誇りに思っている。そして、予備役となった今もお、美しき祖国の空を護る使命に、改めて身が引き締まる思いを抱いている。

特攻戦没将兵の御霊よ、永遠に安らかに、そして日本に御加護を

(終わり)

(追記)

ちょうどこの稿を書き終えた時期に、オバマ米合衆国大統領が、原爆犠牲者の慰霊のため、広島に歴史的訪問をされた。前日までの雨も上がり、好天の下、一連の行事を終えられた。米大統領は、五軍(平時には四軍)の総指揮官でもあることを考えれば、今回の広島訪問の意義は極めて大きく奥深いものであると思う。特に「特定の国」に対して、今後色々な意味で計り知れない影響を及ぼすことと知っている。日本人として心から感謝している。



福岡縣護國神社



護國神社参道入口の檜の大鳥居

平成28年度  
第4回「福岡県特攻勇士  
慰霊顕彰祭」に参列して

評議員 飯田 正能

平成28年5月4日(水) 15時から福岡縣護國神社境内にある特攻勇士之像前において、福岡県特攻勇士慰霊顕彰会主催により斎行された「第4回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭」に、当顕彰会を代表して参列させていただいたので、その概要及び所見等を次のとおり報告いたします。

一 はじめに

福岡縣護國神社「特攻勇士之像」の奉納除幕式は、平成24年12月8日、大東亜戦争開戦記念日を期して執り行われたが、その慰霊顕彰祭は、平成25年以来毎年、5月4日に斎行されることになっている。その背景について若干説明しておきたい。

毎年5月3日、4日には、福岡縣護國神社の春季慰霊大祭が執り行われている。4日はその当日祭で、広い社殿前庭の左右には幾張りもの大テントが設置され、県内各地からの御遺族、崇敬者代表、招待者、一般参列者等約千

人規模の慰霊大祭が、10時から11時半頃まで、厳肅盛大に斎行される。華麗な神楽舞なども奉納され、参列者全員による玉串奉奠・参拝が延々と続く。しかも、毎年5月3日、4日は、福岡市の伝統的な初夏の一大イベント「博多どんたく」祭りの当日である。「博多どんたく」の由来については、大方ご承知であろうが、国選択無形民族文化財ともなっている古い民族行事「博多松ばやし」を起源としており、また「どんたく」は、オランダ語のNondak(休日)がその語源と言われている。その「博多松ばやし」と護國神社の慰霊大祭とは、古くから関係が深い。英霊奉慰の意も兼ねているからである。「博多松ばやし」は、福神・恵比須・大黒の三福神と稚児の四つの流れで構成されており、どんたくパレードの幕開けを飾るほか、市中を祝つて回り、4日の正午頃には、四つの流れが合同で、招魂祭の古事に依り、護國神社に参拝することになっている。同時に、護國神社の参集殿では、11時40分頃から14時半頃まで、神賑奉納演芸大会として各種どんたく隊や舞踊会、吹奏楽隊等による演芸等が賑々しく披露される。それらの慰霊行事の締め括りとして、本慰霊顕彰祭は、静寂を取り戻した境内の一隅、木立に囲まれた「特攻

勇士之像」の前において、護國神社宮司が斎主となり、厳肅に斎行されているのである。したがって、本慰霊顕彰祭に参列の御遺族を始めとする多くの参列者も、午前中の慰霊大祭の後、「博多松ばやし」、奉納演芸等を楽しみながら時を過ごすことができるのである。「博多松ばやし」の第一は、福神流れであり、その主役は福神である。福神は福祿寿に因んで、張り貫きの長い頭をかぶり、福神の面を着け、白無垢の上に黄絹の打ち掛け、手に唐団扇を持って馬に乗る。第二は、恵比須流れで、主役は珍しい夫婦恵比須である。男恵比須は烏帽子をかぶり、恵比須の面を着け、右手に釣り竿、左脇に大鯛を抱き、錦の袖無羽織姿で馬に乗る。女恵比須は天冠をかぶり、若女面を着け、左手に玉を抱き、檜扇を手に赤い袴姿で馬に乗る。第三は、大黒流れで、主役は大黒である。大黒は黄絹の頭巾をかぶり、大黒の面を着け、緞子の服に白袴、大きな紗金袋を背負い、手には打ち出の小槌を持ち、米俵を左右に付けた馬に乗る。第四は、稚児流れで、主役は天冠をかぶり、舞衣に緋の袴をはいた少女を乗せた棧敷台を引き、所要所で地謡、鼓に合わせて優雅に舞う。以上それぞれの流れには、色分けされた派手な袴、裁つ着け(裾を紐で



博多松ばやし・福神流れ



④稚児

③大黒

②恵比寿

①福神



博多松ばやし・傘鉾



博多松ばやし・護國神参拝

膝に括り着けて、下部を脚絆のようにした袴姿で、紅白の鼻緒の下駄を履いた多数の男達の一団が列をなして付き添い、それぞれの行列には、華麗な花飾りを付けた傘鉾各3本がつく。

終戦後昭和21年5月、「松ばやし」と「どんたく」が8年振りに復活した際には、肩衣を紙で作り、馬は張りぼてを首から胸に下げ、三味線、太鼓などをかり集めて、「博多どんたく」のお囃しを、戦災で瓦礫の街となった市中に響かせながら練り歩いて、復興への大きな勇気を与えてくれたと言われている。その後、昭和37年に「どんたく」は、市民総参加の福岡市民の祭り「博多どんたく港まつり」となり、今年は55回目である。市内30余箇所に設けられた演舞台では約520団体、1万4千名による各種演技が披露され、各所のどんたく広場では約230

団体、2万3千名のパレードが練り広げられ、観客数も2日間で200万人を数える全国有数の祭りに発展した。

福岡護國神社は、福岡市中央区六本松1丁目にあつて、大濠公園の東、福岡城址の南側、NHK福岡放送局とは隣合わせの好位置にある。福岡城外の元福岡聯隊練兵場跡地約5万3千坪を境内並びに外苑として払下げを受けて社殿を創建し、内務大臣指定により福岡縣護國神社として昭和18年4月30日、鎮座祭が斎行された。しかし、昭和20年6月、米軍の空襲により本殿以下一切の建造物を焼失し、その後長く仮社殿で祭祀を続けてきたが、県民の至誠により昭和38年5月、現社殿の竣工を見ることができた。御祭神の数は、明治初年の博多の乱、佐賀の乱、台湾征討、秋月の乱を始め西南の役、朝鮮東学党の乱、日清・日露の戦役、シベリア出兵、満洲・上海事変から大東亜戦争に至る戦没者で、福岡県出身の英霊、12万9826柱に上る。春季（5月3日、4日）秋季（10月第2日曜日及びその前日）の慰霊大祭が約千名の参列の下に盛大に斎行されるのを始め数々の祭儀が奉仕されているが、中でも、8月13日～16日の「お盆みたままつり」には、遺族、崇敬者より献上された数千に及ぶ献灯ぼんぼりで、境内

は幻想的な雰囲気に包まれる。天皇、皇后両陛下には、皇太子、同妃両殿下時代の昭和49年8月2日に御参拝にられた。社域は広大で、3千余本の樹林に囲まれた社殿、前庭の石畳と芝生の広場は広大で、参道入口に建つ、檜の大鳥居は、高さ13m、柱の直径は1.6mもあつて木造の鳥居では日本一と言われている。

## 二 本慰霊顕彰祭の概要

前記のとおり、「福岡県特攻勇士之像」は、平成24年12月8日、建立除幕式が斎行され、福岡縣護國神社に奉納されたが、同勇士之像は、護國神社境内の西の木立内、参集殿前に、本殿に正対して安置されている。この場所は特別の場所と言えらる。除幕式執行後の奉納神事・式典は、直ぐ脇の参集殿において斎行された。

福岡県出身の特攻戦没者は、陸軍特攻計110柱、海軍特攻計191柱、合計301柱に及ぶ。その英霊の霊簿は同勇士之像の台座に奉納されている。そして、副碑の正面には、

「私たちは決して忘れはすまい。日本が昭和十六年から二十年にかけて、日本の独立と存続とを守り、且つ欧米列強から植民地化されたアジア諸国を開放するために大東亜戦争で米・



慰霊顕彰祭祭場



献歌（全員斉唱）



特攻勇士之像及び副碑

ことを考えて欲しい。  
 平成二十四年十二月八日  
 （大東亜戦争開戦記念日）  
 特攻勇士之像建立福岡県委員会  
 と、背面には「海行かば 水漬くかば  
 ね 山行かば 草むすかばね 大君の  
 辺にこそ死なめ かえりみはせじ」と  
 刻まれている。  
 慰霊顕彰祭は、境内にようやく静け  
 さが戻り、木立を吹き抜ける薫風が心  
 地良さを感じるようになった15時定刻  
 に開始された。前日からの風雨を予測  
 し、特攻勇士之像前には、大小の天幕

英・支・蘭と戦い、緒戦の赫々たる戦  
 果にも拘らず、戦い利非ずして戦況不  
 利となる。沖縄県にまで敵の上陸を許  
 す事態となり、この敵の圧倒的戦力を  
 阻止すべく、遂に一機一艇をもって敵  
 艦に体当たりする苦渋かつ壮絶な攻撃  
 戦法を取らざるを得なかったことを。  
 持てる力をすべて尽くして散華され  
 た二十歳前後の英霊の崇高な勇姿を末  
 永く後世に伝えるべく、特攻隊戦没者  
 慰霊顕彰会の協力を得て、ここに設け  
 た。

に代えても護るものが存在するという  
 ことを考えて欲しい。  
 平成二十四年十二月八日  
 （大東亜戦争開戦記念日）  
 特攻勇士之像建立福岡県委員会  
 と、背面には「海行かば 水漬くかば  
 ね 山行かば 草むすかばね 大君の  
 辺にこそ死なめ かえりみはせじ」と  
 刻まれている。  
 慰霊顕彰祭は、境内にようやく静け  
 さが戻り、木立を吹き抜ける薫風が心  
 地良さを感じるようになった15時定刻  
 に開始された。前日からの風雨を予測  
 し、特攻勇士之像前には、大小の天幕

が設置されて、紅白の幔幕を張りめぐ  
 らし、献花に彩られた祭壇が設けられ  
 ていた。参列者は、御遺族、御来賓、  
 一般参列者を含めて200余名に及ん  
 だ。御遺族は、陸軍5名（内同伴者1  
 名）、海軍6名（内同伴者2名）、合計  
 11名（内同伴者3名）であった。来賓  
 は、福岡県特攻勇士慰霊顕彰会傘下の、  
 福岡県偕行会・福岡水交会・福岡県郷  
 友連盟・福岡県海友会・正しい歴史を  
 考える会・日本会議福岡・赤坂政経塾  
 等の各団体代表者の他、衆参両院議員、  
 各町長・町議会議長・市議会議員、自  
 衛隊福岡地方協力本部長（松永康則1  
 等陸佐）等20数名であった。  
 祭・式典は、次に掲げる式次第に基  
 づき整齐と進められた。清澄なクラリ  
 ネットの吹奏が心に染み渡った。  
 祭主・菅原道之会長の気迫の籠もつ  
 た慰霊顕彰の辞（後掲）はもとより、  
 塚田征二副会長の開会の挨拶（後掲）  
 の中で紹介された、神風特攻隊に関す  
 るアメリカ水兵の「回顧録」の中の言  
 葉には深い感銘を受けた。  
 参列者全員で斉唱した「海ゆかば」  
 の献詠と「同期の桜」「加藤隼戦闘隊」  
 の献歌には、御英霊たちもさぞ喜んで  
 唱和されたことであろう。  
 式典は16時20分、滞りなく終了し、  
 参列者は、来年の再会を約して散会し

た。

○ 式次第

開会 15時

開会に先立ち御遺族、議員他御来賓の紹介

の紹介

紹介者 津田慶一副会長(福岡水交

会会長)

司会者 別府正寛(日本会議福岡)

同補佐 済藤一樹(赤坂政経塾)

祭典之部

1 開式のことば(兼挨拶)

塚田征二副会長(赤坂政経

塾塾長)(後掲)

2 国旗に敬礼(クラリネット吹奏・

讃井 章貴先生)

3 国歌斉唱

4 黙祷(「国の鎮め」クラリネット吹

奏・讃井 章貴先生)

5 神事(福岡縣護國神社)

修祓之儀、降神之儀、献饌之儀

祝詞奏上 田村豊彦宮司

慰霊顕彰の辞 菅原道之会長

(後掲)

玉串奉奠・拝礼(関係者は代表に合

わせて拝礼)

福岡縣護國神社田村豊彦宮司

祭主 菅原道之会長

御遺族(参列の御遺族全員)

議員代表 鬼木誠衆議院議員

議員代表 川口浩福岡市議会議員

県市町代表 宮内實生岡垣町長

福岡県借行会 岩崎正武副会長

福岡水交会 津田慶一会長

福岡県郷友連盟 吉田邦雄代表

福岡県海友会 宮原泉代表

正しい歴史を考える会

竹口博忠代表

日本会議福岡 山本泰藏代表

赤坂政経塾 塚田征二塾長

その他の参列者全員

和田哲夫代表

献花(各会ごと参列者全員)

撤饌之儀、昇神之儀

祭典終了 神職退下

式典之部

1 斎報披露 (岡田敏江理事)

2 献詠「海ゆかば」 (全員斉唱)

3 献歌「同期の桜」「加藤隼戦闘隊」 (全員斉唱)

4 御遺族代表挨拶 松井宏喜様

5 閉会のことば(御礼) 神塚正喜理事

(後掲)

○ 慰霊顕彰の辞

本日ここに、平成二十八年年度福岡県

特攻勇士慰霊顕彰祭を執り行うに当た

り、謹んで申し上げます。

福岡県の多数の方々のお熱いお気持ち

による献金を頂いて、平成二十四年

十二月八日、特攻勇士之像が当地に建

立されました。

以来、永代神楽祭として毎年護國神

社春季例大祭に合わせて、五月四日に

特攻勇士慰霊顕彰祭を執り行つて参り

ました。

大東亜戦争は今を去る七十五年前の

昭和十六年十二月八日に始まりまし

たが、ハワイ真珠湾攻撃の九軍神のお一

人の古野繁實海軍少佐は本県での特攻

勇士第一号となりました。

緒戦は目を見開く大進撃でありまし

たが、昭和十七年六月のミッドウエー

作戦では、敵に三倍する兵力であり乍

ら不運にも予期せぬ大敗となり、それ

を転機として我が国は守勢となり、ガ

ダルカナル等の南方戦線やフィリピン

では敗色が濃くなり、昭和二十年四月

一日には、敵は遂に沖繩本島に上陸を

開始し、これに対するに我が聯合艦隊

は既に力無く、遂に空中・海上・海中

よりの必殺の体当たり特別攻撃を採用

するの止む無きに到りました。

陸軍も友軍の急を救うべく、航空に、

又、海上挺進隊にと、これに呼応して

奮闘したのであります。

特攻隊員は主に二十歳前後の若者で

あります。福岡県出身の参百巻名の

方々は、そのお名前はこの特攻勇士之

像の内に奉納されてあります。

当然の事ですが、子供は無く、優し

かった父母も既に居られません。然し

乍ら貴方がた勇士の事を私共は決して

忘れる事は無いのです。

天皇、皇后両陛下におかれては、特

攻の事もよく御存知であり、沖繩・サ

イパン・パラオ・ペリリュー島に続き、

フィリピンにも赴かれ、慰霊の弔いを

されました。

有り難い事でありませぬ。

本日も今ここには、貴方がた特攻勇

士の勇氣と国を思う情熱と実行力とを

理解し語り継ぐ御遺族や同志多数が集

まって居ります。そしてこれからも毎

年五月四日には此の像の前に集まっ

て、特攻という何ものにも替えられな

い「誠」と「勇氣」とがあった事を偲

び語り合い、言い伝え続ける事を誓い、

慰霊顕彰の辞と致します。

尚、次回より当委員会の会長は塚田

征二氏に引継ぎを致します。皆様のお

変わりなき御協力を宜しくお願い申し

上げます。

平成二十八年五月四日

福岡県特攻勇士慰霊顕彰会

会長 菅原 道之

○開式のことば

福岡県特攻勇士慰霊顕彰会

副会長 塚田 征二

ワシントン大学にある日米外交史の

中に、アメリカ水兵たちの「回顧録」があります。その中に「神風特攻隊」に関する記述がありました。

これは実際に戦闘に参加した一水兵の言葉ではございますが、この言葉の中に、戦争の真実がありますので、ご紹介いたします。

「十機くらいの神風がアメリカ航空母艦に突っ込んでくる。気が狂いそうな恐怖に震えながら水兵たちは機関銃を撃つ。ほとんど三十分くらいで撃ち落とす。だが、時折一機だけがいくらか機関銃を浴びせても落ちない。銃弾の波の間をくぐり、近づいては逃げ、また突っ込んでくる。国の為に死を覚悟し、体当たりせんとし、横殴りの雨のような機関銃の弾を見事な操縦技術で避け、航空母艦を撃沈しようとする恐るべき敵に水兵たちは深い凍りつくような畏敬と恐怖が入り交じったような複雑な感情を持つ。死闘が続く。そしてとうとうその神風を撃ち落とす。その瞬間どっと大歓声が湧き上がる。その後、甲板上がシーンとした静寂に覆われる。

水兵たちはその素晴らしい敵日本人パイロットに戦士としての畏敬の念を感じるとともに『なぜ落ちたのだ』『これだけ見事に戦ったのだから引き分けにし、基地へ飛んで帰ってくれば良

かったのに』と言う。

アメリカ水兵たちの感情は、愛国心に燃えた一人の戦士が同じ心を持って戦った戦士に感じる「人間性」であろう。これは、戦争の美化ではなく、激戦の後、生き残った者が心の奥深く感じる戦争の空しさだ。

南太平洋の島々や東南アジアでの日本兵とアメリカ海兵隊との壮絶な戦いは、沖繩へと続く。「玉砕」という日本軍の戦い方はアメリカ人たちには理解しがたいものであった。だが彼らは「日本兵の勇敢さ」と「戦士としての誇り」は十分に理解していた。

先の大戦で散華された多くの純粋な若者たちは、彼らの驚嘆すべき祖国愛の高揚とその比類ない勇氣の故に、一層痛ましいものであります。

散華された我が国の若者たちは、言葉の最も高貴な意味において英雄であります。我々はこれからも大東亜戦争において散華された英霊の方々を、その中でも特に、神風特攻隊として散華された方々の慰霊を末代まで行っていくことは、当然の責務であると考えております。

ラオ・コスソル水道にて戦死の実弟松井 宏喜様)

遺族を代表いたしまして御挨拶を申し上げます。本日の慰霊顕彰祭、誠にありがとうございます。

私事ですが、私の兄も神風怒濤隊の特攻勇士として十九歳で散華いたしました。存命であれば満九十歳です。遺品は写真だけでしたが、兄が、この護國神社内の特攻勇士之像として、堂々としているように見えます。

兄は、祖国日本を護るため、覚悟を決めて特攻をしたのだと思います。今日、こうして私たちが生きているのも、散華した英霊に護っていただいているからだと思えます。

本日、皆さんと共に特攻勇士に慰霊の誠を捧げることができました。これからも私たちは特攻勇士を語り継がなければなりません。

ここに英霊の安らかなる御冥福を祈念いたしました。挨拶とさせていただきます。

平成二十八年五月四日

遺族代表 松井 宏喜

### 三 所見

前記のとおり、本慰霊顕彰祭の特色の一つは、傘下団体の多さと各団体の

活動の多彩さであろう。それは主催団体である福岡県特攻勇士慰霊顕彰会の菅原道之会長（福岡県偕行会長・陸士57期）の多彩な御活躍と人脈の広さによるところが大であるが、同会が、平成20年12月6日修復落成式を挙行した福岡陸軍墓地の、石碑修復改良委員会、次いでNPO法人陸軍墓地修復改良保存委員会（会長はいずれも菅原道之氏）を母体とし、志しある地元の政治・経済・社会団体等に広く呼び掛けて特攻勇士之像の建立奉納を実現し、その永続的な慰霊顕彰祭の斎行を図られたことによるものと思われる。また、その背景には、前記の博多どんたく港祭りにおける「博多松ばやし」の護國神社詣で見られるような、地元市民の戦没者に対する崇敬と慰霊の誠あつてのことと史料する。

本慰霊顕彰祭が末永く斎行され、特攻勇士の、護國の赤心と偉業が永遠に語り継がれていくことを祈念して止まない。

## 平成28年度・第50回 「特攻殉国の碑」慰霊祭に 参列して

副理事長 藤田 幸生

第50回目の震洋特攻隊の「特攻殉国の碑」慰霊祭が、平成28年5月8日、長崎県川棚町新谷郷しんやこうにおいて執り行われた。ご案内を頂き、当顕彰会を代表して参列したので、次のとおり報告します。

私にとっては、3度目の参列である。場所は、長崎空港から車で1時間くらい佐世保方面に走った大村湾沿いの集落にあり、この地は、震洋部隊の訓練が実施された場所である。碑は、集落の小さな公園の一角に建立され、その前には大村湾が、穏やかに広がっていた。今回も移動には、海上自衛隊第22航空群の世話になった。後輩は、有り難いものである。若い時、私は一度、



「特攻殉国の碑」慰霊祭場

ヘリコプター操縦士として、大村航空隊に勤務したことがある。昭和49年頃のことである。現在は、組織編成が改編され、自衛隊航空集団の隷下にあるが、当時は佐世保地方隊所属のヘリコプター部隊であった。現在、艦載機は、海外派遣の護衛艦に搭載され、また、救難輸送ヘリコプターは、熊本地震災害派遣で、超多忙な中、慰霊編隊飛行まで実施してくれた。

慰霊祭は、雨上がりの曇天、穏やかな春の日の中、盛大に、粛々と執り行われた。全国から御遺族、戦友が集まり、海上自衛隊からは、佐世保総監部幕僚長始め、音楽隊、儀仗隊、各部隊指揮官、大村航空基地から第22航空群首席幕僚他、ヘリコプター3機が、編隊で参加してくれた。来賓として宇都隆史参議院議員、長崎県知事代理、山口川棚町長、初手同議会議長、自衛隊支援団体の外村佐世保水交会長、山田長崎県父兄会長等が参列、それら全般



「特攻殉国の碑」慰霊祭場

を、地元の町内会、婦人会、子供会と共に、新谷郷廣川英雄総代が、取りまとめて執行された。地元をまとめるのは、大変だったと思う。

今年は、第50回目の慰霊祭ということで、参列者も多く、300人以上を数え、マスコミの取材も、写真班を同伴し、数組が来場していた。翌朝の読売新聞、東京新聞等にも報道された。

式典は、新谷郷の山口役員の司会により開式、艦旗掲揚、国歌斉唱、黙祷、慰霊の辞、拝礼、弔銃発射、献花、慰霊編隊飛行、献歌（「オールド・ダックス」の皆さん）、音楽隊演奏（「鎮魂同期の桜」「海ゆかば」「川の流れのように」「君が代行進曲」「軍艦マーチ」）、合唱「同期の桜」、閉式、御礼の言葉と、約1時間半にわたって執り行われた。

地元川棚男性合唱団「オールド・ダックス」の皆さんによる献歌は、「震洋にいのる」「憩い給え」等この慰霊祭のために作られた歌で、歌詞も感動的



儀仗隊

であった。この合唱団は、北海道小樽等県外にも演奏旅行をしているという。

「震洋」（陸軍では「マルレ」と呼ばれる同型式のものがあった。）は、一人か二人乗りの、ベニヤ板で出来たモーターボートだった。その実物大の模型が作られて飾られていた。先端に爆薬250kgを搭載して、来襲する敵艦船に突っ込むものだった。この作戦は、昭和19年頃からフィリピンで始まり、沖縄、南西諸島、九州、四国、房総等太平洋沿岸の各海域で実施された。

「特攻殉国の碑」保存会・新谷郷総代・廣川英雄様による最後のご挨拶には、今回の第50回慰霊祭が無事、盛大に終了したことに感謝と、安堵の気持ちで素直に述べられていた。

本当にご苦労様でした。慰霊祭を終了して大村に引き上げる車中、小粒の雨が降り始めた。まるで、終了を待っていたかのようなタイミングであった。



ヘリコプター3機編隊による慰霊飛行

### 第66回関西白鷗遺族会慰霊祭並びに「あ、特攻」勇士之像慰霊祭に参列して

評議員 原島 淳子

平成28年5月22日(日)、京都霊山護國神社において斎行された「第66回関西白鷗遺族会慰霊祭並びに「あ、特攻」勇士之像慰霊祭に、当顕彰会を代表して参列させていただきました。

当日の温度は30度を超え、朝から真夏のような暑さにも関わらず、受付開始時間より前に参列の皆様が見受けられ、懐かしそうにお仲間の方々とは談笑されている姿に胸が熱くなりました。

11時開始の慰霊祭に先立ち、10時30

分、元海軍飛行予備学生第13期の加藤昇氏及び同期生により軍艦旗の掲揚が行われました。

慰霊祭典は、本殿において国歌斉唱に始まり、修祓・斎主一拝・斎主祝詞奏上と続き、関西白鷗遺族会山田正克会長による祭文奏上、加藤氏による奉納謡曲、玉串奉奠と、式次第に則り、神社木村宮司様の挨拶の後、来賓として私も挨拶をさせていただきました。

その後、関西白鷗遺族会山田会長の挨拶と続き、参列者全員で献歌「同期の桜」を斉唱しました。同期生が前に出て歌ったこの「同期の桜」は、同期生が同期生の為に歌う本当の「同期の桜」であり、その歌声に胸が痛くなり、目頭が熱くなりました。

式典終了後は、参列者全員で記念撮影を行い、引き続き、「あ、特攻」勇士之像に玉串奉奠をいたしました。その前に、特攻隊戦没者慰霊顕彰会の概要と「あ、特攻」勇士之像の話をしてほしいとの依頼があり、かいつまんでの説明ではありますが、させていただきます。皆様熱心に聴いて下さったので良かったと思います。

その後、山の上の昭和の杜にある、「白鷗顕彰の碑」に向かって玉串奉奠の後、斎館において、懇親会が行われました。

懇親会では、海軍飛行予備学生第13期同期生の方々のお話を聞かせていただいたり、軍歌を歌ったりと、和氣藹藹の内に終了しました。懇親会の時間が短かったと思ったのは、私だけだったでしょうか。

とが、何より嬉しく思いました。また、関西白鷗遺族会の山田会長はお若いながらも気持ちの熱い方で、90歳になってもこの慰霊祭は続けていくという力強いお言葉もありました。同じく京都霊山護國神社の木村宮司様も熱いお気持ちをお持ちの方で、慰霊に関しても長く続けて下さると思います。

白鷗遺族会は、終戦直後の昭和21年11月9日に、最も多くの戦死傷者を出した海軍飛行予備学生第13期の復員同期生の方達が、米軍MPに取り囲まれた中、築地本願寺において第1回慰霊法要を執り行い、その後海軍飛行科予備学生・生徒各期の戦没者2485名の慰霊と遺族慰問のため、遺族と生存同期生が結束し、昭和27年3月、社団法人白鷗遺族会を設立し、慰霊活動を

されてきた会です。残念ながら平成8年に全国組織の社団法人は解散し、全国13の地域の白鷗遺族会に分かれ、慰霊事業の継承をされていたとのことです。現在残っているのは、関西白鷗遺族会だけとお聞きしました。若き山田会長のもと、関西白鷗遺族会及び慰霊祭が長く長く続くことを願って止みません。

最後に次の句を捧げます。  
「桜舞え 飛び征く君の 大空に」



第13期予備学生による軍艦旗掲揚



あ、特攻像前における玉串奉奠



懇親会時の13期加藤昇氏による話

今回第13期同期生の方の参列者は4名でした。一式陸攻のパイロットだった方、零戦・紫電改の搭乗員だった方、教官だった方と、様々な方がおられました。皆様お元気ですが、皆様お元気でいらっしゃることを祈ります。



6月23日は、沖縄「慰霊の日」である。沖縄戦最後の激戦地となった本島南部糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園内にある「国立沖縄戦没者墓苑」(厚生労働省社会・援護局管理…献花台の奥の納骨堂には、沖縄戦での戦没者18万余柱の御遺骨が納められている。戦後地域の住民らの手によって集められた御遺骨は、当初、各地に建てられた納骨堂や慰霊塔に納められたが、昭和32年以降は、日本政府が当時の琉球政府に委託して「戦没者中央納骨所」(那覇市識名)に集められ、次いで、昭和52年2月25日、この「国立沖縄戦没者墓苑」が造られてからは、御遺骨はここに移された。この戦没者墓苑を取り囲むように、「平和の礎」を始め、各都道府県の遺族らによって建てられた慰霊塔や軍人・軍属・県職員等の慰霊塔がある。「平和の礎」は、国籍、軍人民間人を問わず、すべての沖縄戦戦没者を追悼するために、平成7年6月、沖縄県平和記念財団によって建てられ、沖縄戦で亡くなった戦没者の名前が刻まれているが、沖縄県出身者については、昭和6年の満洲事変以降に、

県内外で戦争により亡くなった全ての方々の名前が刻銘されている。これらの合祀者数は、平成20年6月23日現在で合計24万734柱、その内訳は、沖縄県出身者14万9130柱、沖縄県以外の都道府県出身者7万7033柱、米国出身者1万4009柱、朝鮮半島出身者446柱、英国出身者82柱、台湾出身者34柱。その後毎年少しずつ、主として沖縄県出身者が追加され、今年も新たに84柱が追加されて、総数は24万1414柱となっている。では、沖縄県の主催による「沖縄全戦没者追悼式」が執り行われた。安倍首相、翁長雄志沖繩県知事を始め遺族ら4千数百名が参列し、犠牲者の冥福を祈って黙祷を捧げた。

翁長知事は、追悼式の「平和宣言」で、「県民が身をもって体験した想像を絶する戦争の不条理と残酷さは、71年の時を経た今でも忘れられるものではない」と強調し、更に沖縄で、米軍海兵隊の軍属が、女性を殺害し遺棄したとして逮捕された事件に触れ、「不安と強い憤りを感じている」と述べた。安倍首相は、挨拶の中で、「過去と謙虚に向き合い、平和な世界の実現に向けて不断の努力を続ける」と表明し、女性殺害事件について、日米間で地位協定上の軍属の扱いの見直しを急ぐ考

えを示した。式典には岸田外相、中谷防衛相、キャロライン・ケネディ駐日米大使らも参列した。沖縄戦は、71年前のこの日、組織的な戦闘が終わった(昭和20年6月23日未明、摩文仁の丘の地下洞窟にあった司令部を出た軍司令官牛島満大將と参謀長長勇中将のお二人は、南面して座し、古武士の型にならない、それぞれの愛刀をもって、従容として割腹自決された。介錯は、剣道5段の坂口勝大尉が見事に務め果たし、予て用意の墓場に遺体を埋め、そこに小さな墓標を立てた。時に午前4時30分であったという。戦後、昭和27年6月、土建業の異組と沖縄県遺族会連合会等の手によって摩文仁の丘の頂上に慰霊碑「黎明之塔」が建立された。牛島大將の辞世の和歌「矢弾尽キ 天地染メテ散ルトテモ 魂還リ魂還リ皇国護ラン」。沖縄県の発表によると、沖縄戦の戦没者は日米合わせて20万656人と推計され、この内、軍人・軍属は、日本軍が9万4136人、米軍1万2520人で、残りの約9万4600人が軍人・軍属以外の沖縄県民であったという。ただし、沖縄県出身の全戦没者数は、12万2228人に上るとい

う。新聞・テレビ等マスコミは、終戦71周年の各種特集を組み、住民を巻き込んで必死の抵抗を続けた沖縄戦の悲惨さを強調するが、報道するのは、戦争の犠牲となった一般住民の事例が殆どであって、軍に協力し、祖国を守らな

がために命を捧げた多くの県民を慰霊顕彰するものは殆どない。那覇市の南部、豊見城市豊見城地区の海軍壕公園には、海軍沖縄方面根拠地隊司令部のあった旧海軍司令部壕跡が残っており、司令官大田實海軍少將(戦死後中将)は、「大君の御はたのものに死してこそ 人と生まれし甲斐ぞありけり」との辞世の句を残し、昭和20年6月13日午前1時、残存部下将兵と共に壮烈な最期を遂げ、ここに海軍陸上部隊の組織的戦闘は終わった。それより先6月6日、大田司令官は、本土への連絡機能を失った県組織に代わって、沖縄県民の戦い振りを海軍次官宛てに打電し、将来県民への特別の配慮をしてほしい、と意見具申をして

いる(電文は後掲)。海軍壕跡の近くには、「海軍戦歿者慰霊之塔」があり、その傍らに、大田司令官の電文を刻む「仁愛之碑」が建っている。沖縄の人々の大田司令官に対する感謝の気持ちを表しているものである。戦後71年を経た今日なお、現地沖縄の人々の心には強烈な思いが染み込ん

であり、戦争反対、基地反対の表向き  
の声は強いが、真の平和を求め、国土  
の安全を希求するサイレント・マジョ  
リティー（物言わぬ多数派）が存在す  
るに違いない。

この日、現地の慰霊行事は、摩文仁  
だけではなく、各地の慰霊碑、中でも  
各戦没従軍学徒の碑（沖繩師範健児之  
塔、一中健児之塔、二中健児之塔、三  
中学徒之碑、和魂の塔、農林健児之塔、  
翔洋碑、沖繩工業健児之塔、開南健児  
之塔、ひめゆりの塔、白梅之塔、南燈  
慰霊之塔、梯梧之塔、ずいせんの塔、  
積徳高等女学校慰霊之碑等）でも行わ  
れているが、中央における沖繩戦戦没  
者慰霊顕彰行事が唯一、靖國神社にお  
ける本顯彰祭であるのは、些か寂しい  
思いがする。ましてや、マスコミがこ  
れを報道することもない。



大田少将の電文を刻む「仁愛之碑」



旧海軍司令部壕



海軍戦没者慰霊之塔

軍は、19年11月、3個師1旅のうち精  
鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力補  
充のため17歳から45歳までの男子の軍  
務徴集のほか、中学校生徒を動員して  
「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒

は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸  
時の戦闘部隊に投入した。中学3年生  
以下の下級生は通信隊員として、上級  
生は勤皇隊員となつて軍事訓練につ  
き、20年3月には沖繩師範男子部、県  
立第一・第二・第三の各中学校、同工  
業・農林・水産学校、市立商業学校、  
私立開南中学校の9校から1880余  
名が「鉄血勤皇隊」及び通信隊に編入  
され、半数は第一線の戦闘に、半数は  
野戦築城に従事した。4月1日の米軍  
上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を  
抱いて米軍戦車に体当たりを敢行する  
壮烈なる光景が各地区の戦場で見られ  
たが、5月中旬首里城の急を救おうと  
して「学徒斬込隊」が志願編成され、

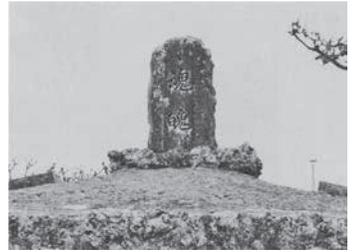
50余名が一体となつて敵陣に突入し、  
壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的  
なものであった。

女子生徒の場合は、「ひめゆり学徒  
隊」として有名であるが、それは沖繩  
師範学校女子部と県立第一高等女学校  
を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因  
んだもので、その他、県立第二高等女  
学校の「白梅学徒隊」、同第三高等女  
学校の「名護蘭学徒隊」、同首里高等  
女学校の「瑞泉学徒隊」、私立昭和高等  
女学校の「梯梧学徒隊」、私立積徳  
高等女学校の「積徳学徒隊」の7校か  
ら動員された従軍看護婦は総数540  
余名に及び、各戦線において、弾丸雨  
注の中、健気にも身を挺して負傷兵の  
看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を  
綴つたが、中でも6月18日には、陸軍  
病院は解散となり、女学生の動員も解  
除されたので、伊原の洞窟にあつた第  
三外科病院では、女学生が従軍服を脱  
いで学生服に着替え、解散式を済ませ  
た瞬間、米軍の急襲馬乗り攻撃が加え  
られ、全員殆ど脱出の余裕なく、一挙  
にうら若き女学生27名の命が奪われた  
悲劇もあつた。その他戦死した女学生  
の数は、動員数の45%240数名に及  
び、男子部の44%830余名と共に動  
員学徒の約半数が尊い命を国に捧げて  
戦死した。誠に痛恨の極みである。

沖繩本島南部摩文仁地区に近い米須  
地区も最大の激戦地であつたが、その  
糸満市米須に「魂魄之塔」という沖繩  
戦戦没者の遺骨を納めた慰霊の塔があ  
る。合祀者数3万5千余柱、建立は昭  
和21年2月で、慰霊碑としては最も早  
い。碑文によると、その地は、戦後、  
真和志村（現在は那覇市の一部）村民  
が、米軍によつて収容・移住を許され  
た所で、村民及び地域住民の協力によ  
り、当時まだ道路や畑の中など周辺至  
る所に散乱していた遺骨を集めて祀つ  
た墓所で、3万5千余柱という、沖繩  
で一番多くの戦没者の遺骨を納めた無  
名戦士の墓であつたが、昭和54年2月  
に摩文仁の丘に国立戦没者墓苑が完成  
し、遺骨は同墓苑納骨堂に分骨して安  
置されているとのことである。この塔  
の建立に当たつては、当時真和志村村  
長であつた金城和信氏を中心となつて  
米軍と交渉し、夫人や村民の協力を得  
て、遺骨の収容、慰霊碑の建立に当た  
られた。氏は戦前、小学校の校長をし  
ておられ、沖繩戦では沢山の教え子が  
戦死し、自身の二人の娘さんも、ひめ  
ゆり学徒隊として戦死されており、こ  
うした戦没者を供養したいという強い  
思いから、その後も戦没者慰霊のリー  
ダーとして、「ひめゆりの塔」「健児之  
塔」などを次々に建立され、沖繩県遺

50余名が一体となつて敵陣に突入し、  
壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的  
なものであった。

沖繩本島南部摩文仁地区に近い米須  
地区も最大の激戦地であつたが、その  
糸満市米須に「魂魄之塔」という沖繩  
戦戦没者の遺骨を納めた慰霊の塔があ  
る。合祀者数3万5千余柱、建立は昭  
和21年2月で、慰霊碑としては最も早  
い。碑文によると、その地は、戦後、  
真和志村（現在は那覇市の一部）村民  
が、米軍によつて収容・移住を許され  
た所で、村民及び地域住民の協力によ  
り、当時まだ道路や畑の中など周辺至  
る所に散乱していた遺骨を集めて祀つ  
た墓所で、3万5千余柱という、沖繩  
で一番多くの戦没者の遺骨を納めた無  
名戦士の墓であつたが、昭和54年2月  
に摩文仁の丘に国立戦没者墓苑が完成  
し、遺骨は同墓苑納骨堂に分骨して安  
置されているとのことである。この塔  
の建立に当たつては、当時真和志村村  
長であつた金城和信氏を中心となつて  
米軍と交渉し、夫人や村民の協力を得  
て、遺骨の収容、慰霊碑の建立に当た  
られた。氏は戦前、小学校の校長をし  
ておられ、沖繩戦では沢山の教え子が  
戦死し、自身の二人の娘さんも、ひめ  
ゆり学徒隊として戦死されており、こ  
うした戦没者を供養したいという強い  
思いから、その後も戦没者慰霊のリー  
ダーとして、「ひめゆりの塔」「健児之  
塔」などを次々に建立され、沖繩県遺



魂魄之塔



一中健児之塔



ひめゆりの塔

族連合会の会長も務められた。昭和53年に金城和信氏が亡くなられてからは、その功績を讃え、「魂魄之塔」と向かい合うように銅像が立てられた。その父親の御遺志を受け継ぎ、「殉國沖繩學徒顯彰祭」を取り仕切り、靖國神社で毎年斎行して来られたのが元国士館大学教授金城和彦先生であるが、その先生も平成26年2月19日、惜しくも逝去された。

今年を取り分け、昨年9月に成立を見た平和安全法制関連法によって集団的自衛権の行使が、条件付で認められるようになり、日米安全保障の深化が図られることが期待されている。しかし、尖閣諸島の領有権を始め、海洋進出・支配権拡大の野望を図る中国への対応、沖繩防衛のための日米安保新体制の確立等、緊急に対応すべき難問が山積し、日本は外交・防衛態勢強化の正念場に立たされている。

そして、その企画・運営もほとんど全部、若い学生諸君によって実施されており、大変頼もしく感じられた。今日、沖繩戦は多くの住民を巻き込んだ無謀な戦闘と評価付けられ、住民の犠牲の面を強調する風潮が強いが、圧倒的に不利な状況下にあつて、将兵はよく勇戦敢闘し、官民また率先協力してよく奮闘し、身命を賭した3箇月にわたる抗戦により、本土防衛のための防波堤としての重任を全うした、その尊い英霊の顕彰とその史実の継承こそが大切なのではないか。

本顯彰會では、昭和32年以来毎年、靖國神社において、これら沖繩殉國学徒の慰靈顯彰祭を斎行して今年第60回の節目を迎えた。御遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しており、特に平成22年以来、前記のような事情によって参列者が減少した。それが一昨年来、倍増するようになったことは、誠に喜ばしい。しかも、その内の約半数以上は、学生や若者など金城先生の志を継ぐ者であることは頼もしい限りである。

第一部の「殉國沖繩學徒をお偲びする集い」では、開会の辞、国歌斉唱2回の後、坂本匡史実行委員長（全日本学生文化会議議長）の熱誠溢れる挨拶に続いて、学生の意見発表として、早稲田大学4年北林裕教君が、首都圏学生の沖繩慰靈巡拝旅行に参加し、現地での学生・住民との交流を通じて、戦没者の慰靈顯彰と国の平和安全保障への理解をより深めることの必要性を痛感した、と述べた。

次いで、御来賓5名の御挨拶があつたが、まず最初に、当顯彰会の副理事長でもある水交會会長藤田幸生元海上自衛隊幕僚長は、沖繩勤務当時の実感や各地の戦跡慰靈巡拝の経験から、沖縄県民の本当の気持ちは、表向きのもとは違つているように思う。各種の報道等が盛んに行われているが、戦争の惨禍、悲惨さや哀しみのみが聞かれるような気がする。我々はむしろ、英霊の志を継いで、未来に向けて何をなすべきかを考え、本当の意味の平和を築くよう努力しなければならぬ。そして、英霊に対して、その志を決して忘れず、心から感謝の気持ちを表しななければならぬ、と訴えられた。

次いで、石神井水川神社の奥野雅司宮司は、神道政治連盟の活動を通じて沖繩での戦没者慰靈顯彰を行っているが、追悼とは、死者の生前を偲び、その死を悲しむことであるが、慰霊とは、死者の靈魂を慰め、その事績を想起し、顯彰することである。したがつ



学生意見発表・北林裕教君



挨拶・坂本匡史実行委員長

て、戦没者を追悼するだけではなく、英霊の事績を顕彰し、その志を継承することが大事である。人は死すれば、そのたましいは陰陽二つ、即ち魂と魄に別れて、陽の魂は天上に上り、陰の魄は地上、即ちこの世に留まるとされる。英霊のたましい、即ち魄は、永久にこの世に留まっているのである、と述べられた。



金城和彦先生の紹介・長谷川博氏



御挨拶・奥野雅司石神井氷川神社宮司



御挨拶・藤田幸生水交會会長

次いで、沖繩出身で、ひかり医院の金城英與院長は、金城和彦先生の著作『嗚呼沖繩戦の学徒隊』を自費再版された経緯に触れ、金城和彦先生、そして父上の和信先生が沖繩戦戦没者の慰霊に半生を捧げられ、取り分け沖繩戦

で、ひめゆり学徒隊員として戦死した御自身の二人の娘さんを含む戦没学徒の慰霊顕彰に尽くされた崇高な精神を永久に継承していかなければならない。和信先生が中心となって建立された「魂魄之塔」を始めとして「ひめゆりの塔」「健児之塔」等々英霊の心を永久に留めるものとして護って行かなければならない、と述べられた。

次いで、沖繩対策本部の仲村寛代表は、現在、沖繩の大勢は反日のように見えるけれども、これはアメリカの占領政策によるものであって、かつての沖繩戦において、沖繩県民は、愛国、愛郷の精神に燃え、身を捨てて戦ったのであり、取り分け、沖繩学徒隊は、会津の白虎隊に比すべきもので、教科書の日本史の中に載せるべきである。同様に、沖繩返還の事実、大田實海軍少将の電文等々、沖繩戦の本当の実態を歴史に明記すべきである。これこそが英霊に心える道でもある、と熱く語られた。

次いで、(株)キャリアコンサルティングの川端隆拓氏も、マスコミの情報は、沖繩の住民の本当の心を伝えていない。沖繩戦における学徒の鉄血勤皇隊は、正に白虎隊であり、ひめゆり学徒隊や白梅学徒隊は、従軍看護隊である。殉国沖繩学徒こそ、愛国の精神に燃え

次いで、参列者から奉呈された献歌  
奏上があり、「国の鎮め」の奏楽のうち、参列者全員、御本殿に昇殿し、玉串を捧げて拝礼し、式典は滞りなく終了した。その後、遊就館旧正面玄関前で、全員の記念撮影を行い、再会を誓って解散した。  
(飯田正能記)

て身を捧げた立派な英雄であり、女神である、と述べた。  
更に同じく御来賓の長谷川博氏は、金城和彦先生の教え子で、高校時代柔道部顧問をしていただいた先生から親しく指導を受けた思い出と、和彦先生の御著『嗚呼沖繩戦の学徒隊』を披露され、沖繩戦に散った若者たちは、戦争犠牲者ではなく、祖国を守った英雄である。我々は、その英霊に対して感謝の気持ちを表すべきである。そして、先生の御遺志は、教え子として生ある限り継承して行きたい、と述べられた。  
次いで、自由民主党の宇都隆史参議院議員からの式電披露があり、第一部の集いは、深い感銘のうちに、15時15分、滞りなく終了した。  
第二部の式典は、靖國神社拝殿において斎行され、国歌斉唱、修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上等の神儀、御遺文奉読、御遺詠奉誦と進み、学生代表により感銘深い祭文が奏上された。

次いで、参列者から奉呈された献歌  
奏上があり、「国の鎮め」の奏楽のうち、参列者全員、御本殿に昇殿し、玉串を捧げて拝礼し、式典は滞りなく終了した。その後、遊就館旧正面玄関前で、全員の記念撮影を行い、再会を誓って解散した。  
(飯田正能記)

【御遺文・御遺詠】

○奥武朝信 命 沖繩県立第一中学校

の大義に生きます。元氣にて最後まで  
頑張つて下さい。

四年生・鉄血勤皇隊

血河山野阿修羅の如し  
學徒挺身死地に赴く

球九七〇〇部隊独立

古波津昇 命 沖繩県立第一中学校

【献楽】(合唱・ゆには合唱団)

工兵第六大隊・摩

五年生・鉄血勤皇隊

○沖繩県立第一中学校校歌

文仁にて戦死、当時

球九七〇〇部隊独立

○沖繩師範学校女子部・沖繩県立第一

数え十六歳

工兵第六大隊・摩

高等女学校校歌

父母上様

文仁にて戦死、当時

○ふるさと

自分は至極元氣にて毎日毎日體を練

若櫻散るべき時は今なるぞ  
十七の春に撃ちてしまむ

○海軍沖繩方面根拠地隊司令官大田實  
少将の電文

國護持の任を果たし、誓つて米英を撃

滅し、大御心を安んじ奉らねばならな

○海軍次官  
宛 海軍次官

い覺悟であります。

【奉納吟】  
嗚呼沖繩戦の學徒隊

宛 海軍次官

父母上様、この戦争を沖繩で粉碎し、

今様・漢詩 金城和彦

左ノ電□□次官ニ御通報方取計ヲ得度

必勝を我が皇軍にをさめるでせう。

和歌 金城ふみ

沖繩県民ノ実情ニ関シテハ県知事ヨリ

父母上様、この戦ひは天下分目の決戦

吟詠 長谷川博

報告セラルベキモ県ニハ既ニ通信力ナ

でありますから全力を盡くし、お父様

今様 矢弾の中で健氣にも

ク三二軍司令部又通信ノ余力ナシト認

共に元氣で頑張りませう。お母様どう

吟詠 長谷川博

メラルルニ付本職県知事ノ依頼ヲ受ケ

かお體を大切になさつて御過ごし下さ

五色の雲に祈るらむ

タルニ非ザレドモ現状ヲ看過スルニ忍

い。この戦ひが終るまで更にみるく世

愛國の姿勢烈火の如く

ビズ之二代ツテ緊急御通知申上ゲ

を迎えるまで。

童顔の學徒防戦に當る

沖繩島ニ敵攻略ヲ開始以來陸海軍方面

清姉様、安子、和子、父母上様のおつ

刀折れ矢盡き我が事畢る

防衛戦闘ニ専念シ県民ニ関シテハ殆下

しやることをよく聞いて、よき日本人

相抱き相擁して遂に玉碎

顧ミルニ暇ナカリキ

になって下さい。そして體を大切にし

悲しさのあまり井戸までかけたれど

然レドモ本職ノ知レル範圍ニ於テハ県

てこの戦ひを頑張り抜いて下さい。

水汲みし子の足あともなく

民ハ青壯年ノ全部ヲ防衛召集ニ捧ゲ残

父母上様、十七年有半訓育して下さい

一ひめゆり部隊に

屋ト家財ノ全部ヲ焼却セラレ僅ニ身ヲ

ましてありがたく感謝致して居りま

二人の娘を捧げた母の歌

以テ軍ノ作戦ニ差支ナキ場所ノ小防空

す。

砲聲天を焦し弾雨降る

壕ニ避難尚砲爆撃ノガレ□中風雨ニ曝

大君に總を捧げ奉り皇國を守り抜か

○漢詩 砲聲天を焦し弾雨降る

サレツツ乏シキ生活ニ甘ンジアリタリ

而モ若キ婦人ハ率先軍ニ身ヲ捧ゲ看護  
婦烹炊婦ハ元ヨリ砲彈運ビ挺身切込隊  
スヲ申出ルモノアリ

所詮敵来リナバ老人子供ハ殺サルベク

婦女子ハ後方ニ運ビ去ラレテ毒牙ニ供

セラルベシトテ親子生別レ娘ヲ軍衛門

ニ捨ツル親アリ

看護婦ニ至リテハ軍移動ニ際シ衛生兵

既ニ出発シ身寄無キ重傷者ヲ助ケテ敢

テ真面目ニシテ一時ノ感情ニ馳セラレ

タルモノトハ思ハレズ

更ニ軍ニ於テ作戦ノ大転換アルヤ夜ノ

中ニ遙ニ遠隔地方ノ住居地区ヲ指定セ

ラレ輸送力皆無ノ者黙々トシテ雨中ヲ

移動スルアリ

是ヲ要スルニ陸海軍部隊沖繩ニ進駐以

来終止一貫勤勞奉仕物資節約ヲ強要セ

ラレツツ(一部ハ兎角ノ悪評ナキニシ

モアラザルモ)只管日本人トシテノ御

奉公ノ護ヲ胸ニ抱キツツ遂ニ□□□□

与ヘ□コトナクシテ本戦闘ノ末期ト沖

繩島ハ実情形□一木一草焦土ト化セン

糧食六月一杯ヲ支フルノミナリト謂フ

沖繩県民斯ク戦ヘリ

県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ラン

コトヲ (□は判別不能)

## 第46回指宿海軍航空基地 「哀惜の碑慰霊追悼式」に 参列して

事務局長 羽瀨 徹也

平成28年5月27日(金)、鹿児島県の南部にある指宿市東方の旧海軍航空基地跡地で行われた「哀惜の碑慰霊追悼式」に、当顕彰会を代表して参列しましたので報告します。

指宿でのこの慰霊祭への参列は、昨年初めて衣笠専務理事が参列していましたが、当顕彰会としては今回が2回目の参列となります。



JR指宿枕崎線・平川駅に掲示されていた最福寺の案内板

### 一 今回の行動

前日移動のため、時間的に余裕がありませんでしたし、知覧特攻平和会館で確認すべき事項(内容は省略)がありましたので、鹿児島空港からバスを利用することにしました。案内等に従い、空港からは「指宿・平川行き」の高速バスで約1時間、「平川」で降り、「平川」から「知覧特攻平和会館行き」のバスに乗り換えて行くことにしましたが、1時間以上も待つことになるので結局、タクシーで向かいました(今後バスを利用される方は、本数が少ないので、確認の上、計画を立てるようにして下さい)。



慰霊公園入口の遺族等から寄贈された燈籠

以前に来た時には気付かなかったのですが、この「平川」を出て「知覧特攻平和会館」に向かう道路のすぐ左横に、フィリピン・マバラカットでの特攻慰霊祭を「徳洲会」と共に斎行している「最福寺(法主・池口恵観)」がありました(最近、覚せい剤所持・使用の罪で起訴され、有罪の判決を受けた元プロ野球の清原和博被告人も、同寺において有名な炎の護摩行を受けている)。

「知覧特攻平和会館」や「知覧特攻平和観音堂」も、毎年5月3日の慰霊祭を執り行っている時とは違って随分



慰霊碑入口に掲示されている戦前の基地配置

閑散とした感じでした。数人の見学者だけのようでした。今回は、当顕彰会が事前に保有しておきたい「知覧特攻平和会館」の入場券購入調整のために訪れたのです。しかし、南九州市の職員でもある同館の館長とも細部規則を確認しつつ調整しましたが、結果的には、入場券は会館の窓口での、当日・現金販売しか取り扱っていないということで、無駄足に終わりました。

「知覧特攻平和会館」を後にして、指宿に向かう際には、「特攻平和観音堂入口」から鹿児島市内行きのバスで「平川」まで行き、乗り換えてJR指宿枕崎線「平川駅」から指宿市役所及び追悼式開催場所の最寄り駅である「二月田(にがつでん)駅」まで行きました。指宿市役所はこの駅の近くにあり、今回の「指宿海軍航空基地哀惜の碑慰霊追悼式」を主催する「哀惜の碑顕彰会」の事務局を担当しているのが、指宿市役所内の指宿市社会福祉協議会の事務局長・富山哲也氏であり、今回も追悼式に参加する旨の事前挨拶で訪問しました。

### 二 慰霊祭に参列

「哀惜の碑」のある場所は、霧島錦江湾国立公園内であることもあって、「慰霊碑公園」として、古墳のような



慰霊祭開始前の「哀惜の碑」

たたずまいをしており、小規模ながらも、指宿市により整然と整備されました。

この「哀惜の碑慰霊追悼式」は、いわゆる下駄ばきの水上機（零式水上偵察機、零式水上観測機、零式観測機及び94式水上偵察機等の航空機）を使用し、特攻機としては多くない、水上機44機で特攻出撃して散華された82柱の英霊を始めとして、指宿海軍航空基地における訓練中の殉職者及び周辺の空襲による一般戦死者を含めた全戦没者192柱を追悼するため、昭和46年から斎行されている慰霊祭であります。通常、航空機の離発着のためには地上滑走路がありますが、当指宿海軍航

空基地には、配置図にあるように、滑走路もなく、水上機を揚陸する施設であるスベリ・エプロン等が海岸沿いに設置されていただけで、慰霊祭は、この基地の防空壕跡地の狭い台上で執り行われています。この基地跡地に指宿市民からの浄財によって、昭和46年に建立された「哀惜の碑」の有名な碑文は、次のように刻まれています。

『君は信じてくれるだろうか この明るい穏やかな田良浜が かつて太平洋戦の末期本土最南端の航空基地として 琉球弧の米艦隊に対決した日々を 片道燃料を積み 見送る人としてないこの海から 萬感をこめて飛び立ち 遂に還らなかつた若き特別攻撃隊員が 八十二人にも達したことを 併せて敵機迎撃によって果てた 百有余人の基地隊員との鎮魂を祈って ここに碑を捧ぐ』

ここに水上機の編成や攻撃の概要等については、昨年参列された衣笠専務理事が、会報「特攻」第106号に細部にわたって記載されているので、今回は省略することにしました。

この碑の横にある観音像は、平成9年12月に、この基地を訪れた一人の観光客が、ここでの戦死者に思いを馳せた時、万感胸に迫り、観音像の寄贈を

思い立ち、建立寄贈されたものであります。その時、「国土の安泰と祖国の発展を念じつつ逝つた戦没者は二度と還ることはない。平和な日本の犠牲となられた霊を慰めなくては・・・」と言葉少なに話されたのが印象的であった、ということです。

この追悼式は、碑が建立された昭和46年から、指宿市在住の旧海軍出身者で組織していた「指宿かもめ会」が毎年5月27日に全国から馳せ参じ、碑前に相集い、慰霊祭を執り行って来たこととであり、亡き英霊に哀悼の誠を捧げ、世界の恒久平和を祈念しつつ今日に至っているようである。現在、この旧「指宿かもめ会」の方々は、平成2年に指宿市長を会長とする「指宿海軍航空隊哀惜の碑顕彰会」組織に移行され、その理事等の役員として活躍されている。

今回の追悼式の模様は、取材に来ていた「南日本新聞」にも掲載されました。「今回で46回目となる追悼式は、海上自衛隊P-3Cの慰霊飛行を開始された。市内の海軍出身者でついでに旧指宿かもめ会を代表し吉田安宏さん(86)が、「戦後70年が経過し戦争の記憶を風化させない努力が必要。尊い犠牲を忘れず、後世に伝え

ていく」と述べられた後、参列者全員が献花を行った」というような内容でした。

追悼式には、主催者の「指宿海軍航空隊哀惜の碑顕彰会」会長である指宿市長（今回は副市長が代理出席）を始めとし、遺族関係者、旧「指宿かもめ会」の方々、近隣の遺族団体及び指宿市の防衛協会、商工会議所、観光協会等の代表者等を含め、約90人の参列者がありました。自衛隊からも自衛隊鹿児島地方協力本部副部長及び知覧分駐所代表も参列に加わっていました。少人数ながら整齊とした追悼式は1時間程で、国旗・軍艦旗降納を最後に閉式となりました。

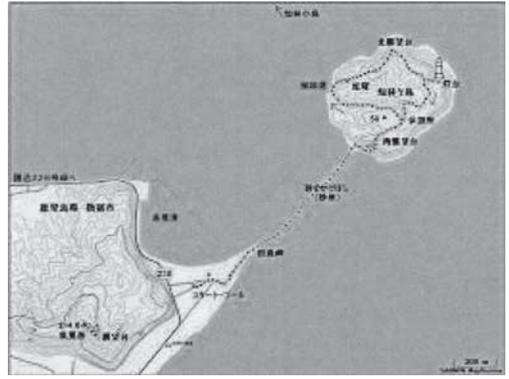
### 三 慰霊地での余談

今回慰霊祭に参列すると決まっておら調べてみると、この慰霊祭が執り行われる会場の至近距離に、有名な日本版モン・サン・ミッシェルとも言われる「知林ヶ島」が存在するというので訪れることを計画しました。大潮である時間帯にのみ、「知林ヶ島」と追悼式が執り行われる魚見岳下の「慰霊碑公園」がある田良浜の岬とが、砂州によって繋がるのです。

宿泊している宿でお聞きすると、運が良いことに、午後4時から7時まで



大潮以外の時は海中に没していて見えない残骸が現れた



田良岬（浜）と「知林ケ島」は通常離れている



前日、知林ケ島に砂州が繋がる前の状況



行く途中で知林ケ島に砂州が繋がっている様子、  
残骸があったのは右の後方海

島に行く途中、大成果がありました。砂州を歩いて行く途中、普通は見られない海岸の海中から、写真のように、間違いなく航空機の残骸(コクピット)と思われる物体が姿を現していたのです。時間も無い行程ですが、その時間を忘れて、何枚か写真に納めました。指宿海軍航空隊の水上機の一機かも知れません。誰が見ても分かる航空機の残骸がそのままにされているのが少し不思議に感じられました。心残りもありましたが、時間がくると戻って来られなくなるため、「知林ケ島」まで歩きにくい砂州の上を急ぎ足で行って、何とか島に辿り着き、急ぎ足で戻って

が大潮で、「知林ケ島」に繋がるので歩いて行けるとのことでした。追悼式が丁度午後4時過ぎに終了しましたので、急いで着替えを済ませ、海岸を歩いて「知林ケ島」に向かうことにしました。往復1時間位掛かるようですが、日が落ちる前に島に辿り着き、引き返してこなくてはならないので、大急ぎです。お聞きした話によると、この「知林ケ島」は、戦前は松に覆われた島だったようですが、指宿海軍航空隊の航空燃料用の松根油の材料として使用するため、島にあった松の殆ど全部が伐採されたようで、現在、大きな木はありませんでした。また、

くるといふ強行軍で、戻ってきた時は、日没間近の7時を過ぎていました。しかし、今回は運が良いことも重なり、追悼式と同じ日に合わせて「知林ケ島」に行くこともできて、英霊の庇護を痛感した一日でもありました。宿に帰ってからは、疲れた体を癒すため、英霊に感謝しつつ、指宿名物の砂風呂で一汗流すこともできました。

## ソ連とドイツにも特攻隊はあった—身を捨てて国を護った若者の情熱—

陸士61期 飯田 正能

ごく短い期間ではあるが、先の大戦中、ソ連とドイツの空軍によって特攻作戦が展開された例がある。

吉本貞昭氏の著書『世界が語る神風特別攻撃隊』（平成24年7月30日第1刷発行・株ハート出版）によれば、「昭和十六年六月に、ソ連軍の特攻隊がドイツ軍の猛進撃を阻止するため、ドイツ軍爆撃機及び機甲部隊に体当たりを敢行しており、『その八名の勇士の名は、ソ連邦英雄としてソ連のほとんどの戦史書に載せられている』またソ連戦闘機ポリカルポフ一六がドイツ軍爆撃機に近づいてプロペラで尾翼を切る作戦を展開しており、これに対抗して昭和十八年の終わり頃にドイツ軍も同じような作戦を展開している。」

「一方、昭和十九年十月二日、ラムヤガー戦闘機隊五〇〇機は、レイヒに来襲した米第八空軍のB17爆撃機編隊千機に体当たりを敢行し、爆撃機の編隊の中で爆弾を爆発させて、パイロットは直前にパラシュートで脱出している。」

「米軍資料によると、この作戦の

戦果は、『重爆撃機四十機が失われ、その内近接体当たり攻撃によるものは二十四機となっている。体当たり攻撃の中には、Werner Geth 大尉のように、パラシュートが開かず、B17とともに墜落したという例もある』

「ナチス宣伝相ゲッペルスは、その著書『ラムヤガーは、今攻撃中である』（昭和二十年三月三十一日刊行）で、『九十%の戦死を覚悟し、しかし、おおきな成功を期待して、ラムヤガーは戦った。四月四日の戦闘では、一二〇機のラムヤガー隊が、重爆撃機千機と護衛戦闘機八〇〇機に攻撃をかけ、少なくとも八機の重爆撃機を体当たりにより撃墜している。この戦いで七十七名が戦死し、二十八名はパラシュートで無事降下した』と記している。また、ドイツが降伏する一カ月前の昭和二十年四月七日に、日本の神風特攻隊に触発されたドイツ空軍の『エルベ特別攻撃隊』約一〇〇機が、ドイツ北部ガルデレーゲン上空で米軍の爆撃機に体当たりを敢行して、約八十人が戦死または行方不明となっている。』

また、多少のデータの相違はあるが、加瀬英明氏著『大東亜戦争で日本はいかに世界を変えたか』（株ベストセラーズ社発刊）の「第七章特攻隊はなぜ讀

えられるのか」の中に「ソ連の自爆機とドイツの特攻隊」と題して以下のように書かれている。

「平成十四（二〇〇二）年に、私は英文で『神風・日本の特攻神 Kamikaze Japan's Suicide Gods』を書いて、イギリス最大の出版社であるロングマン社から、出版した。ロングマン社は、ウインストン・チャーチルの出版社として、知られている。私は海外でよく知られている神風特攻隊を通して、日本の近代史と文化を世界に知らせたいと、思い立って書いた。と

くに、私は日本が先の大戦において、侵略戦争を戦ったのではなかったことを、理解させたかった。この本を、できるだけ多くの外国の読者に読ませるために、日本人ひとりが著者であると、日本の宣伝だと思われてしまうので、アメリカの戦記作家であるアルバート・アクセルに共著者になってもらった。アクセルは四十年來の、親しい友人である。アクセルには、先の大戦におけるソ連空軍の自爆隊と、ドイツ空軍の特攻隊であったゾンダーコマンド（ドイツ語で特別部隊）と、イギリスの決死隊について、一章ずつ書いてもらった。

ソ連は独ソ戦の初期に、ドイツ空軍による首都モスクワに対する爆撃に悩

まされていたが、スターリンがロシア空軍に、自爆部隊を編成することを命じた。一九四一年六月に、レオニード・ブレリン少尉が操縦する戦闘機が、ユンカース88爆撃機に、はじめて体当たりして、自爆した。航空特攻は、日本がけっして最初ではなかった。ソ連の発表によれば、体当たり攻撃によって、三百機以上のドイツ機を撃墜している。

ゾンダーコマンドは、第二次大戦末期にナチス・ドイツが、日本の神風特攻隊に触発されて、連合軍爆撃機に体当たりするために、志願者を募って、編成された。およそ三百人の志願者によって、『エルベ・ゾンダーコマンド』が、つくられた。一九四五年三月に、連合軍の千三百機の爆撃機が、八百機の戦闘機によって護衛されて、エルベ河流域のデッサウ上空に、侵入した。百八十三機のメッサーシュミット109戦闘機を中心とする、『エルベ・ゾンダーコマンド』が突入して、体当たりを試みたが、数機を落とすのに成功しただけで、ほとんどが撃墜され、十五機だけが生還した。これが、最初で最後の実戦となった。五月に降伏した。」

更にも、前記吉本貞昭氏の著書によると、英国の史家ハミルトンは、大

戦中、欧米人の間でも身の危険を顧みず、難に赴く自己犠牲の姿が見られたと述べており、また、元「回天」搭乗員小灘利春氏の著書にも、次のような記事が書かれていることを紹介している。

「第一次大戦のさなか、フランスの首都パリを空襲したドイツ軍の新兵器ツェッペリンを迎え撃つたフランス空軍の新鋭戦闘機『モラル・ソルウニエ単葉』一機が、飛行船を狙って小型爆弾を次々と投下したが外れてしまった。『武器を使い果たした戦闘機の操縦士は、堪りかねたのであるう、急降下してこの飛行船をめがけて突入した。水素ガスを満たして空中に浮かぶ飛行船は大爆発を起し、火だるまとなって墜落した』。

一方、昭和十九年十二月二十六日、重巡洋艦『足柄』が軽巡洋艦『大淀』および駆逐艦六隻と艦隊を組んで、フィリピン・ミンドロ島サンホセ市に上陸した米軍の大部隊を急襲した時、陸上基地から発進した一機の大発単座戦闘機 P 38 が、『足柄』に向かつて機首の四挺の十三ミリ機銃を撃ち続けながら、そのまま左舷に突入した。この体当たりで、『機体が後部兵員室の中に飛び込み、航空燃料と装備弾薬のために大火災になった』。米軍機の自爆

で四十七名の戦死者を出した『足柄』は、傷つきながらも十分な戦果をあげたが、引き揚げる途中で米軍操縦士の遺体を丁寧に水葬し、その壮烈な最期に、同じ軍人として敬意を表したのである。『仲間の戦死者と同じく「足柄」乗組員全員の敬礼を受けて、毛布に包まれた彼の遺体は南の青い海に沈んでいった』。たとえ被弾していても、負傷していても、すぐ近くに味方の飛行場があるので、帰れば自分は助かる。水面に不時着してもよい。それなのに、この米人パイロットは日本の神風特攻機と同じ行動をとったのである。この二つの例は、味方の危機に遭遇して、『これが今の自分の取るべき最善の手段である』と、とっさに判断して、体

間ならば誰でもこのように、自分の身を捨てても、人の命を救い、危機にある味方を救う行動に出るのである。川に落ちて溺れかかった子供を見た人が、その子を助けるために、危険を冒してでも飛び込んで助けるのと同じである。それが人の自然である」と。

また、安延多計夫氏もその著書の中で次のように述べていることを紹介している。

「最後の攻撃法として、捨て身の戦法は、我も敵もとったところである。

人として、誰が死なんと願う者があるうか。ただ自分の生に対する愛着よりも、国を愛する熱情が、さらに強いから、よるこんで身を捨てて、任務のために、国のために、一死もって最後の活躍をしているのである。これは実に非情であり、無慈悲にみえるが、これが戦いというものの姿なのだ」と。

以上の記述によっても分かるように、いずれの国においても、国家・民族の危急存亡の時に際して、若者は、決死の覚悟で身をもってこれを護ろうとするものである。しかしながらそこには、各国、民族の歴史、伝統文化、宗教等によって考え方の違いも出てくるであろう。

日本の場合は、その根底に、伝統的な武士道ないしは大和魂が存在することとは間違いなのである。日本の武士道とは、武術・武道などの戦闘技術論ではなく、道徳的、精神的なものを追求するものである。それは戦争に対峙して、生死を賭ける際の武士の心構えから生まれたものであり、社会的責任を自らに問う意識から生まれたものである。礼節を守り、信頼に込め、名を重んじ、他に引けを取らぬよう意地を通し、勇気を発揮しようという、その意識の結晶が武士道なのである。

「武士道といふは、死ぬ事と見付け

たり」。「善と思ふ悪し、善悪ともに悪し、思はざるところ善し」、佐賀藩士山本常朝の『葉隠』に書かれた武士の行動の美学である。武士の行動の美学は道徳をも超越する。実行のみが道徳以上の価値を持つと考えるのである。武士が標榜するのは、高潔さに裏打ちされた精神的な優位性であり、決して力で他者を屈服させることだけを指すものではない。

## 海軍飛行専修予備学生14期の特攻—柳井氏の証言と吉田少尉（戦死後大尉）の手記を通して—

会員 寺崎 慶子

### 旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式

平成28年4月2日、鹿児島県鹿屋市において、旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者追悼式が執り行われた。

追悼飛行や儀仗隊の弔銃など海上自衛隊の協力もあり、盛大な追悼式であった。追悼式の主催は鹿屋市。案内には「太平洋戦争中、旧海軍鹿屋航空基地を飛び立ち、国難に殉ぜられた英霊を慰め、併せて恒久平和の実現を祈念するため、旧海軍鹿屋航空基地（現在海上自衛隊鹿屋航空基地）を一望する慰霊塔建立の地で追悼式を挙行いたします」と書かれている。

私が参列する切っ掛けとなったのは、柳井和臣氏からのお声掛けだった。「今度鹿屋というところで追悼式があるから来てみないか」と言われ、是非参列させていただきたいと思い、直ぐに返事をした。

柳井氏は、海軍飛行専修予備学生14期で、昭和20年5月14日に、神風特別

攻撃隊第六筑波隊として鹿屋基地より出撃したが、会敵せず帰投するという経緯を持つ。現在94歳。

4月1日、新幹線で鹿児島を目指した。鹿児島に着いてからバスで2時間。その日は夜、献灯式があるということ。早速、小塚公園にある特攻隊戦没者慰霊塔へ向かった。多くの人が献灯しており、慰霊塔が暗闇の中、ほんやりとその姿を現していた。

その日の夜、鹿屋市に着いた感想を柳井氏に尋ねると、「戦死した仲間にあえるようで嬉しい。追悼式に参列する同期は私しかない。鹿屋基地は第一線部隊の基地であり、出撃の地であるから愛着がある。さらば祖国と一回出撃し、さよならした場所だからね」と言われた。お元気ではあるが94歳。はるばる広島から鹿屋市まで慰霊のため足を運ぶ理由が少し理解できたように思った。

柳井氏は、「特攻隊員が犬死にと言われる風潮があった昭和33年より鹿屋市はこの式を続けてきた。鹿屋市の人々は熱心で大事にしてくれる。自衛隊の基地にもなっていて地元理解があるように思う」と話された。

式の後、鹿屋航空基地史料館を拝観。鹿屋航空基地の正門の外に位置し、建物の周りには飛行公園が整備されてい

る。様々な史料が展示されており、海軍から海上自衛隊のことまで、大変勉強させていただいた。中でも、御遺書や御遺影の展示室は心に迫るものがある。御遺影を一人ひとり拝見すると、その面影はまだあどけなさが残る。そこで柳井氏が「吉田！吉田！」と話し掛けているのを見た。同じように追悼式の際、慰霊塔の銅版名簿に刻んであるお名前にも声を掛けていた。「鹿屋に來たぞ、ということでも声を掛けた。彼らにはそれは聞こえると思う。だから声を掛けたんだよ」と後で教えてくださった。

吉田信少尉（戦死後大尉）は、東京帝国大学出身の海軍飛行専修予備学生14期。神風特別攻撃隊第五筑波隊として鹿屋を出撃し、昭和20年5月11日、沖繩周辺海域で特攻戦死している。柳井氏と土浦海軍航空隊で同じ班となり、寝食を共にした仲で、氏にとつては畏友であったという。その吉田少尉の手記が広島県江田島市の海上自衛隊第一術科学校教育参考館に保管されており、この度拝見させていただくことができた。遺された手記には、柳井氏の名前が書かれており、二人で励まし合い、訓練をした強い絆が伺える。

追悼式があった夜、「特攻隊員を偲ぶ市民の集い」と「灯ろう流し」が、「特

攻隊員を偲ぶ会 鹿屋」主催で開催され、特攻隊員の遺書朗読、柳井氏インタビュー、灯ろう流しが行われた。誠に温かい会で、御遺族の方も一緒に、特攻隊員をお偲びするひと時となった。

インタビューの中で柳井氏が語った「御遺族の方に申し上げたい。戦友たちは『やるぞ！』という気持ちで勇んで征ったと確信しています。期待を背負って、誇りを持って死んでいったということ。特攻で戦死された方は尊く美しいと思います」という言葉が印象に残っている。後に御遺族の方が駆け寄り、「長年考えていたことが理解できた気がします」と言われる場面があった。戦後生まれの何も知らない私が思うより戦友や御遺族の方々の戦後は長い。

### 柳井和臣氏の体験を聞いて

私が初めて柳井氏にお会いしたのは、平成26年6月のことである。ある雑誌で特攻隊の特集の取材を受けられていた記事を読み、お名前を知った。特攻隊として出撃され帰投—その思いは如何なるものだったのか、なぜ特攻隊を志願されたのか。学生時代より大東亜戦争について自分なりに勉強していた私は、直接お話を伺いできない

だろうかと思え、お手紙を差し上げたところ、お会いしていただけることになったのだ。

87歳まで会社勤めをされていたという柳井氏はとてもお元気で、しっかりと口調で丁寧にお話しくださる。

ここからは、そのお伺いした貴重なお話を交えて、稿を進めていきたい。

柳井氏は慶應義塾大学在学時、昭和18年12月に、学徒出陣で大竹海兵団に2等水兵として入団。その時の心情について、「考え方は色々ありますが、基本的に、時代の流れだから不満には思いませんでした。当然行くべきを猶予されてしまったから、覚悟はできていたというのが、戦時下の学生である私の考えでした」と語る。

予備学生試験に合格し、昭和19年2月に、海軍飛行専修予備学生として土浦海軍航空隊で基礎訓練を受けたという。6月に出水海軍航空隊で訓練の後、戦闘機の搭乗員(操縦)として筑波海軍航空隊に着任した。単独飛行、編隊飛行、洋上飛行、夜間飛行、戦闘訓練などがあり、1日30分以上操縦したという。そして昭和20年2月、特攻を志願した。

出水での思い出話として、体育の時間に実施された教官教員チームと学生チームの野球試合で快勝したお話、赤

とんぼによる初飛行の訓練に励んでいた時、後ろに教官が搭乗し、訓練で操縦ミスがあると通信筒で頭を殴られたお話など笑顔で教えてくださった。

その後、筑波で特攻隊に志願、訓練に取り組むことになるが、その心境とどのようなものなのだろうか、私には想像もつかない。柳井氏は「楽しくやっていましたよ。技量を磨くという感覚です。また、自分の死というよりは、どう戦果を上げるかということを考え、雑念はありませんでした」と言われる。誰しも無駄死にはしたくない。その思いは皆共通し、常に死と隣り合わせである危険な訓練に集中することになったのだろう。「死ぬため」の特攻ではなく、「敵艦を轟沈し、戦果を上げる」ための特攻攻撃なのだ。

無論、一言で「特攻隊員」と言えども、一人ひとりの人間であり、皆育った環境も違えば、考え方や思い、特攻に対する受け止め方も千差万別であろう。その前提の上でこの稿を進めていきたい。

### 特攻志願

「希望するかしないか」

筑波海軍航空隊で、海軍飛行専修予備学生14期を主力とした特攻隊が編成されたのは、昭和20年2月のことである。当時、特別攻撃は一般化しており、

「来るものが来た」と柳井氏は思ったという。当時、指名された時のことについて「選ばれると思っていました。長男でない、技量の面、ゆきあしがよい、未婚、と条件が揃っていましたからね。死は覚悟していました」と語る。

「一矢報いたいという気持ちもありました。それがプレッシャーの中での志願だった。空気として否を書く雰囲気ではなかったとも感じていましたが、何より護るべきものがあるという考え方から希望しました。順番は遅かろうと早かろうと、何時か死ぬので関係ありません。あがいても死ぬのです。これは逃れられようもありません。それに皆納得し、希望どおり特攻隊員になったので、割り切り、思い残すことはないという心境でした。」と志願の心情について語った。「当時の考え方として、家門や出身校の名を汚したくない、脱落したくないというお互いの牽制もありましたね。また出征前、郷里の人々が日の丸を振って見送ってくれたことを思い出し、『一度出たからには』という気持ちもあつたと思います。」家門や出身校、そして故郷への思いは、その後も厳しい訓練を耐え抜く原動力となったという。

柳井氏は、遺書を書く代わりにアルバムを遺すことにした。このアルバム

には、多くの写真が貼り付けられており、自分の身の回りで起こる色々なことが解説されている。今でもきれいな形で残っており、大切に保管されていたことが伺える。

「お父さんお母さん!では出発します。笑って死にます。不孝者でしたがお許しください。先に行きお待ちして居ます。此のアルバムを差上げます。時々想ひ出して下さい。呉々もお体を御大切に」と最初のページに大きく書かれていた。内容は独特のユーモアたっぷりで明るく過ごす姿を写真に収めていた。吉田少尉との写真も収められており、「最愛なる吉田少尉」と題されている。戦友たちが書いたという綺麗な挿絵も描かれ、当時は偲ぶ貴重なアルバムだ。

柳井氏は、「親に心配をかけたくないという気持ちはあつたと思います。死ぬということは人生に一度しかない事ですから、にっこり笑って死んだ方がいいという思いでした」とアルバムについて語った。

当時、特攻をどう捉えていたのだろうか。

柳井氏は、「まともな戦争ができず、敵対する上で特攻が唯一取り得る一つだったと思います。起死回生の一打を何とか与えたかったのです。それを航

空隊が私達に『君たちしかいない』と賭けてきた。『よしやろう』と思いきや「と振り返る。「どうやってお役に立てるかという考え方ですね。自分の攻撃はデットボールでいい、飛行時間が短く未熟な搭乗員である自分の命は亡くなるが、相手に打撃を与えられればという思いがあったのです。日本を救うのは我々だという自負もありました」という。

そして、「押され気味なのは感じていました。勝てないのは解っていました。負けてはいけません。祖国防衛ということですから」と強くお語りになった。

### 吉田少尉の手記を拝読して

4月末、筑波から富高基地へと進出することとなった。ここから前述した吉田少尉（特攻戦死後大尉に特進）の手記を見てみたい。誠に細かく記してあり、当時を知る貴重な手記である。「出撃前数日のメモ」として、筑波海軍航空隊での最後の夜であった昭和20年4月25日から始まっている。筑波から出発の日、4月26日の日記から見てみたい。

### 26 / IV

愈々出発の日なり。早朝より宿舍内は荷物整理の跡で雑然とし別れを告ぐる

友人達の群れしきりに出入す。(中略)一同盃を挙げて壮途を祝ふ。

一同愛唱の「同期の桜」を合唱す。(中略)

ダグラス三機十時頃到着。直ちに便乗して出発す。総員見送の位置につきて帽を振る。滑走路を走りつゝ、見れば之に沿ひて立並び帽を振る人々の顔々々々……懐しき顔なり。(中略)

富高に降着す。午後三時頃なり。(注)海軍飛行場記号)は爆撃の跡にて所々に穴ありき又雨後なる為にや地面軟かし。(攻略)

### 27 / IV

洞窟内の一夜も明けたり早速飛行服に身を固め飛行場に整列す。五色の吹流し、御楯と大書せる長旗翻へり第一線色濃厚なり。(中略)指揮所の気分亦第一線色にして今迄の如き練習航空隊気分とは大いに異なる。愉快なり。(中略)夜洞窟前の河べりに立ちて朗吟す。柳井と共なり。月明川面に映えて銀白色なり。

富高基地に進出し、いよいよ緊張感も増してきたことが手記からも感じられる。柳井氏は「吉田君とは夜近くの岬で学生時代の想い出や、死ぬ運命への抵抗感などを語り合いました」とい

う。「当時甘いものが不足していたため『死ぬ前にもっと甘いものが食べたいな』とか、『餓ドーナツを腹いっぱい食べたなら死んでもいいな』と話していました」と回想する。

手記に記してある朗吟については、「吉田君はバイロン・ハイネの詩。私は漢詩でした」と思い出を振り返り、「富高から鹿屋へ進出すれば一日か二日の特攻と考えていましたから、切迫感があったと思います。ただ前向きに、いこう、覚悟を決め積極的に行こうという気持ちでした」と話してくださいました。

### 28 / IV

手記は続く。(前略)飛行作業本日は五二型を以て航法降爆せり。洋上を出づればミスト四面をこめ房の中はムツとする湿気籠りて頭が変なり。約廿分間の洋上航路を終へてヱに帰投し降爆をなす。一寸手慣れぬ感せり。

降着すれば吾等第一次進発隊に出動命令下りし旨伝へられ急ぎて食事攝りに行く。急に出撃なりと思へど胸中何の動揺もなし。只愉快に談笑する自らを見て不思議にさへ思ふ。石丸が「矢張り俺達八天長節に突込める。俺の勘が當つた」と戯に繰返す。午後四時半整

列とて急ぎて食事せる時作戦室より電話ありて「本日の鹿屋発は延期」と。急に又予定の変更なり。本日又偶然にも一日命を伸ばしたり。何事も偶然なり。さりとして凡てを委ね切つたる心境なる故胸中なんらの動揺もなし。又明日位は命令出るならんと思ふのみなりき。夜目を仰ぎて歩み柳井の恋物語を聞けり。

### 29 / IV

(前略)午後急に進出命令来り整列1630と達せらる。(中略)本日も亦中々暑し。急ぎ荷物整理し整列。岩木(筆者注:岩城)副長より戦況及び激励の言葉あり乾杯。出発す。帯に花を挿して爆音高く離陸せり。ミスト深し。一路南下す。鹿屋着1800頃。上空大いに混雑。又爆撃の跡惨たるあり。大分離れたる小学校なる宿舍に落着く。日既に暮れて蠟燭の灯ほのかなり。(後略)

鹿屋に着き、宿舍であった野里小学校に着いたことが記されている。現在小学校跡を見ると、緑鮮やかで花が咲いており、いかにものどかな印象で、特攻隊の宿舍であった面影はない。

### 30 / IV

本日は珍らしく朝の定期空襲来らず。八時に整列す。中島中佐のお話あり。

昨日の戦果大なりと。(中略)午後一時奄美大島南方に敵Kd B発見。之が攻撃命令下る。吾らの出撃なり。整列迄後十分。大いに張切る。父上、母上、兄弟姉妹多くの知人、其の他私を愛して下さった人々よ。私は必ず立派にやって参ります。ではさようなら。

吉田少尉は出撃に際し、整列10分前に最後の言葉を書き遺したが、「今又此の手記を續けんとハ思はざりき」と手記は続く。攻撃命令が中止になったのである。「一同稍々呆然として気合い抜けする事甚し。あ、それど一日生されば又一日の努めあり。一層よき突撃を取行せん」と記している。

当時の状況について柳井氏は「死の宣告が出て中止になると一日か二日生き延びたなという感じでした。戦場ですからぬ」と言う。

続いて5月5日の手記には「夜町田黒崎と語り合ひて楽し。生の心のふれ合ひ吾知らず涙こぼる」と記され、5月6日の手記には「今日はお出撃今日はお出撃と心待ちつ、延びゆくも亦疲れるものなり。遺書遺品凡て発送を終りてもう家にはお線香が上がつてると皆大に笑ふ」としたためた。

丁寧に綴られた手記は、読み進めるにつれ死が近づく。その中で戦友と語

り合い涙し、また大いに笑い、自分の命と向き合う姿が伺える。

### 特攻前夜

昭和20年5月10日、いよいよ出撃前夜の手記である。

### 10/V

快晴。朝Bさんの定期来る。午前中暖き陽を浴び裸にてキャッチボールを興じある時、明日全機出撃、本夕四時半搭乗員整列と伝へらる。愈々来るべき時来れりとしてピリツと身体迄引緊れり。早速身の廻りを整理し折よく奉仕に来れる理髪師に頭を刈つて貰ふ。紅の「マフラー」に寄せ書なす。一同の顔緊張の中に明るし。四時半中島佐より作戦の概要伝へられ各針路定めらる。明日は陸海軍の総力を挙げて特攻泊地艦船基地及び機動部隊を徹底的に叩き以て沖繩周辺の敵兵力を殲滅せんとの雄渾壮烈なる作戦なり。(中略)帰りて準備完了し最後の風呂に入る。ドラム缶のバス亦趣あり。吾等の後に續くべきものの為に明日は全力を盡くして頑張らんと深く思へり。

柳井氏は「出撃に際してある程度緊張感がありました。うまくぶつかるか、それまでが任務であり、それは未知数の世界です。いよいよ本場の闘いという思いになります」と語った。

出撃前夜の手記は続く。

思へば我が廿四年の生涯も本日にて最後なり。父上母上に充分の孝養を盡くし得ざりしは今尚残念に思はる。然れども亦余が常に人生の第一線(表街道)を昂然と歩み来りしその道その気持は父上母上共にご諒解下され。たとへ短く共宜しいお前の人生は張り切つてをつたと云つて下されば満足です。信は自らの卑怯未練と常に戦ひつ、又時には瘦せ我慢を續けつ、も尚余人の後塵を浴び或ひは人の犠牲に於て安居するを屑しとせず、己が信ずる儘自らの犠牲に於いて明るき天下の街道を直進して来ました。今顧みての微笑が私を慰めて呉れます。短き人生にも私は一の信条を得て托し得るを幸福に思ひます。吾人は如何なる逆境に於ても先づ己れを空しうする誠より出発すべし。之ぞ私の Idealism であり Romanticism です。

如何なる偏見、誤解も恐れず又自己のきまり悪さにも敢然打ち克ち誠を以て直接に他者の胸中に飛び込む時、其処にこそ人生の眞の楽しき美しさ素晴らしさがひらけてくる。偽りを以て身を鑑ひ猜疑と皮肉を以て他を看るは、如何で人生の眞骨髄に觸れ得ませうか。気取りを捨て疑ひに克つて純眞偽りな

き赤心に立ち帰り率直天真に行動すべし。誠の一字。身を捨てて得る眞実。

斯く思ひ来る時私の人生は最後迄明るい希望に充ちてをります。たとへ肉体は南海に滅せんとも尚一層大いなる魂の世界の啓くる如き思ひが致します。やがて父上母上の来らるる時私は明るい明るい笑顔で元氣一杯お迎へしますよ。でも出来る限り父上様母上様も何時迄もお元氣でお暮し下さい。私も遙かにやがて来べき我が家の楽しき楽しきまどい団欒の再びある日を夢みます。(中略)皆がお祖父ちゃんお祖母様を中心に楽しく団欒する日には是非僕も加へて下さいね。(中略)私は多くの人々に愛せられ漸く長じて今日に到り唯々感謝あるのみです。今國家の危難を前に大君の命のまにまに命を捨つる私の最後の努力が皆様の御恩返しとなる事を信じ且つ祈ります。

では愛する皆々様さようなら  
御機嫌よう

昭和廿年  
五月十日夜

自分の身が明日亡くなるというとき氣遣うのはやはり家族の事であった。家族と一緒に過ごしたいという素朴な願いと家族に只々感謝する思いが語り掛けるように綴られている。そして、

「私の人生は最後迄明るい希望に充ちてをります」と、その短い人生の中に光を見出す姿が窺える。

幾ら書いても際限のなかったであろうその気持ちを書き綴る思いは如何ばかりのものであったのであろうか。

### 出撃の日

昭和20年5月11日、吉田少尉は神風特別攻撃隊第五筑波隊として出撃する。24歳。

柳井氏も吉田少尉と共に出撃予定だったが、空襲により愛機が燃えてしまふ。「少し残念でしたが、後から行くからな」というトライナ気持ちでした」と当時の心境を語る。

そして、昭和20年5月14日、いよいよ柳井氏も出撃となる。米艦隊を索敵攻撃するため、神風特別攻撃隊第六筑波隊として飛び立ったのである。網のような扇型の索敵コースを行き、敵艦隊が見当たり次第体当たりする作戦であり、柳井氏は一番北側のコースを飛んだという。

出撃の時の心情について「さらば祖国と言った時、親兄弟も確かに去来しましたが、印象に残っているのは山並み。鹿屋基地の山並みがあるでしょう。桜島や開聞岳よりこの山並みを祖国日本の見納めだとしつかり見ました。それは覚えていきます」と語る。

しかし、米艦船を見付けることができず、「反転帰途ニツク」と、途中で爆弾を投下し帰投。投下した瞬間、少し零戦が上がったという。「索敵コースはちゃんと飛び、見付けたら体当たりしろという命令でしたからね。というものの特攻に出たからには、やはり帰るのは後ろめたい。しかし、爆弾を投下し、無電を打ち、反転してからは何も考えずに帰投しました」と回想する。この日、神風特別攻撃隊第六筑波隊として14機が特攻、散華している。

### おわりに

特攻隊員の写真に残る笑顔は明るく朗らかに見える。これは現代に暮らす私達には理解し難いかもしれない。なぜ今から特攻に出撃するというのに笑顔なのか。理解できないために「それは教育で洗脳されているからだ」などと勝手に自分の都合の良いように解釈する。それでは理解する努力をしているのか、といえれば必ずしもそうではないように感じる。

『カミカゼの真実』（光文社・平成22年）の中で著者であり、海軍飛行専修予備学生であった須崎勝彌氏は次のように記している。

「熱狂的愛国心とはマインドコントロールされた状態を意味するようだ

が、大正半ば生まれの出陣学徒の知性はそれほどに貧しかっただろうか。理性はそれほどに脆かっただろうか。完成はそれほどに粗野だっただろうか。」御遺書や遺筆を拝見し、その一人ひとりの生と死を見詰めた時、「洗脳」という言葉は雲霧消してしまふ。そして、理性的な文章、卓越した知性や豊かな感性に圧倒される。比べることさえ憚られることだが、私よりも若い方が大半にもかかわらず、その文章や達筆に自分が恥ずかしくなる。

柳井氏の遺したアルバムにも沢山の笑顔が見える。「死はいつたん決めて日常生活に戻ります。悲しい苦しい思いは表に出しません。葛藤は表に出さないので。それと同時に生を充実したものにしたいという思いもあります。逃れたいという人は一人もいませんでした」と話す。

決して「洗脳」されていたわけではない。心の中では苦しい葛藤があった。それは生きていく人間、更に限りない未来、希望を持った若い青年にすれば尚更のことだ。その葛藤の末、自分の生と死に真剣に向き合い、思い悩み、そして、出撃の日には爽やかなる姿で

敢然として一筋に飛び立った。もちろんそこには私利私欲などみじんもない。ただ愛する人のため、祖国のため、

国難の真つ只中に飛び込み、散華したのである。この誠実純粋な思いを一体誰が否定できるであろうか。

大東亜戦争において多くの青年がその尊い命を国のために捧げた。どのような思いをもって特攻を敢行したのか。柳井氏は「俺がやる！何とかなる！」という思いがありました。戦果を上げたい、大死にしたいという思いで一生懸命訓練に取り組みました。これしかない、最後の一発という気持ちもありましたね。もちろん生きたいという願望もありましたが、それをすべて捨てて、ただ祖国の存続、家族の安泰のため、死を以て報いんとしました。一人ひとりの考え方も人生、生活もみんな違いました。共通しているのは、誇りを持って死んだということだと思います」と言われる。

見返りがないどころか、自分の命を亡くしてしまう特別攻撃。過去も未来も、そのすべてを断ち切り、自分の命を投げうって護ろうとした日本は今、英霊の目にどう映っているのだろうか。

特攻を無駄死にという安易な発言や、ただ、かわいそうだったと一言で片付けてしまう哀れみの言葉など。また、戦後偏向するメディアや教育より特攻隊員は犬死に「させられて」しまった。しかし、その尊い命の上に今、日



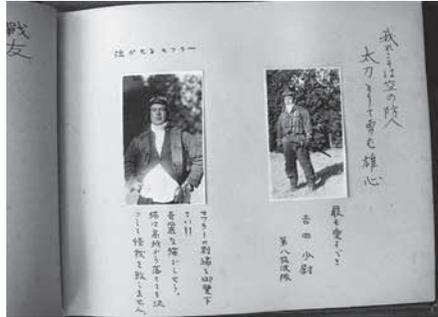
灯ろう流しにて 柳井氏



鹿屋追悼式にて献花 柳井氏(左)と寺崎(右)



野里小学校跡地



柳井氏のアルバムより



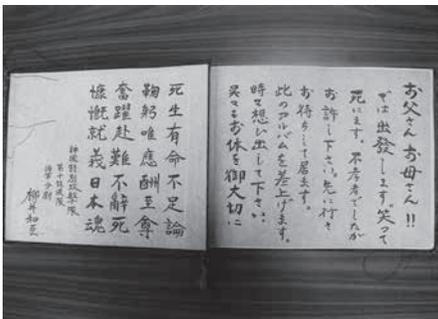
吉田少尉(左) 柳井少尉(右)



吉田信少尉 (柳井氏撮影)



柳井和臣少尉(富高基地にて)



柳井氏のアルバムより



柳井氏のアルバムより

本は立っている。従容として征った先人の志を汲むことが、後世に生きる私たちの取るべき態度なのではないだろうか。

「吉田君は本当に純粋だった」柳井氏が改めて手記を見て最初に発した言葉である。そして、「当時の若者は言いたいこともたくさんあったと思いますよ。最後は何も言わずに出て征きました」と続けた。

吉田少尉の人生は、確かに短いものだったかもしれない。しかし、丁寧に書き綴った言葉は、70年以上経った今でもなお、光り輝いている。吉田少尉は、出撃の日、次のように手記に残し、特攻散華した。

11/V  
晴れの出撃黎明四時半整列、五時半鹿屋発にて一路南下す。目指す八只沖繩本島南方洋上の敵機動部隊。誓って必中轟沈。大戦果挙つて御稜威を宇内に残さん事を祈る。

卒寿を迎えて特攻の友を  
偲ぶ

会員・少飛15期 滝波 登

昭和20年8月、北支で終戦を迎え、大陸から佐世保に上陸、郷里に帰る途中、戦死された同期生を思い浮かべ、自分はこのまま家に帰ってもよいのだろうか、と自問しながら復員してから70余年、本年4月に91歳の高齢となりました。顧みれば、若くしてこの世を去った戦友達が胸に浮かんでまいります。

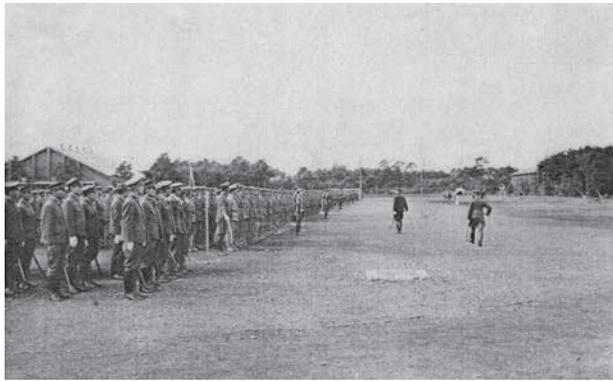
昭和17年10月、東京陸軍航空学校に入校し、卒業近くになると、陸軍航空技術研究所において、適性検査を行い、その結果により、操縦・航空通信・整備の各上級校に入校しました。私は幸い、熊谷陸軍飛行学校に進み、新田教育隊において、九五式練習機、通称赤トンボによる操縦訓練を受け、昭和19年7月、戦闘隊に配属となり、中国大陸・北支城陽飛行場に所在した、第29教育隊に配属、戦闘隊の基本教育を受けました。

昭和19年12月、戦闘隊としての基本教育を終了し、中国北京の南方、南苑飛行場に所在した、第14教育隊に配属となり、九七式戦闘機による戦闘訓練

に従事しておりました。

昭和20年2月、特攻隊員の指名が行われ、全員、希望を提出しましたが、若桜隊一隊だけの編成となりました。熊谷飛行学校から同じ中隊において訓練を受けてきた同期の若松藤夫氏ほか8名の同期生が指名されたのであります。

東京陸軍航空学校に入校し、同じ教育訓練を重ね、特攻の指名を受け、今日では考えられない軍人精神の涵養に努め、鍛え上げられた同期生が、この指名により、御国の護りとして散華されたのであります。



昭和17年10月12日東京陸軍航空学校入校式

希望を提出するも、指名のないため、卒寿を越える歳まで生き延びた者として、入校時の校長訓示を読み直し、慰霊の誠を捧げたいと思います。

「第十期生徒入校二当り與フル訓示

大東亞ノ戦亂正ニ酣ニシテ我方陸軍航空ノ威武世界ヲ震駭セシメ益々増強ヲ要スル秋其ノ後繼者トシテ簡拔ノ榮譽ヲ荷ヘル諸子ヲ迎ヘ茲ニ入校ノ式典ヲ舉行スルヲ洵ニ同慶ニ堪ヘサル所ナリ諸子既ニ深ク又堅ク心二期スル所アルヘシト雖更ニ本職ノ所懐ヲ開示シ之カ服膺ヲ要望ス

一、皇國軍人ハ大元帥陛下ノ股肱トシテ皇基ヲ恢弘シ國威ヲ宣揚スルヲ以テ其ノ本分トス諸子ハ今日以後皇軍航空幹部ノ後繼者トシテ此ノ重大且光榮アル職責ノ一端ヲ負ハサルヘカラス  
サレハ一意本校生徒タルノ本分ニ向ツテ邁進シ以テ誠心ノ顯現ニ努メテ堅確ナル軍人精神ヲ涵養シ嚴肅ナル軍紀ニ慣熟シ皇軍幹部タルノ人格ノ修養ト精神ノ鍛鍊トニ精進スヘシ  
二、本校ノ教育ハ皇軍航空幹部タルノ素地ヲ作ルニ在リ故ニ精神充實シ體力強健ナル生徒ノ育成ニ勉ムサレハ諸子ニ對スル教育ハ精神要素

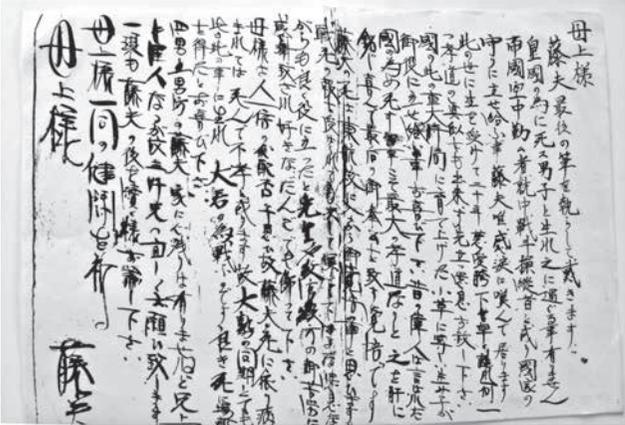
ノ涵養ニ重キヲ置キ之ヲ基本トシテ學術ヲ進メ知能ヲ啓発シ以テ上級學校生徒タルニ必要ナル識量ト基礎的技能トヲ附與ス  
諸子ハ此ノ要旨ヲ銘肝シテ上官ノ訓育指導ヲ受ケ一意修養ニ精進シ終始強健ナル體力旺盛ナル氣力鞏固ナル意志ヲ保持シテ學校教育ニ耐ヘ以テ初志ノ貫徹ヲ圖ルヘシ

三、諸子ノ學ハントスル本校ハ既ニ數千ノ卒業生ヲ出シ今次大東亞戰ニ於テハ夫々空中戰士又ハ技術士トシテ赫々タル武勲ヲ樹テツツアリ其ノ後繼者タル諸子宜シク先ツ速ニ校風ニ親ミテ少年飛行兵タルヘキ生徒ノ品位ト面目トヲ保チ日夜聖論ヲ奉體シテ義ハ山嶽ヨリモ重ク死ハ鴻毛ヨリモ輕シノ覺悟ヲ堅クシ以テ先輩ノ遺風ト偉績ヲ恥シメサランコトヲ期スヘシ

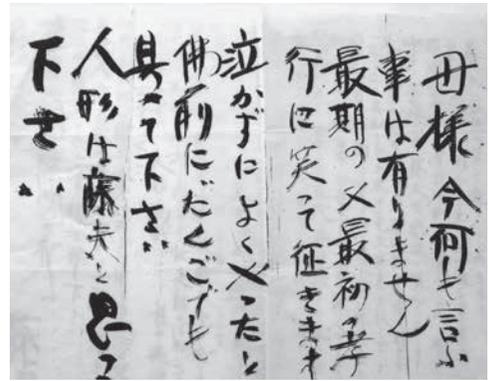
之ヲ要スルニ諸子ハ將來我カ航空幹部タルヘキ榮職ヲ辱ウスヘキ身分ニシテ本校ニ於テハ實ニ其ノ基礎ヲ養成スル所以ニ想到シ校規ニ從ヒ僚友相僚リ切磋琢磨以テ本校教育ノ目的ニ逼ハンコトヲ期スヘシ  
昭和十七年十月十二日  
東京陸軍航空學校長  
三木 吉之助

昭和20年2月に指名された若松隊は昭和20年6月3日、第111振武隊として、鹿児島県知覧飛行場から出撃、沖縄洋上において散華されました。東京陸軍航空学校は、昭和17年10月入校の第十期生が最後の期であります。

翌年の4月に学校令の改正により、陸軍少年飛行学校に改正されました。上級校に直接入校した先輩を、陸軍少年飛行兵第一期生に、東京陸軍航空学校入校の十期生を、陸軍少年飛行兵第十五期生と呼ぶことになりました。



第111振武隊若松藤夫少尉命遺書（若松隊）



第111振武隊若松藤夫少尉命遺書（若松隊）

平成28年度「千葉県特攻勇士之像慰霊祭」に参列して

事務局員 金子 敬志

平成28年5月26日（木）11時から、千葉縣護國神社において、「千葉県特攻勇士之像慰霊祭」が斎行された。

本慰霊祭は、千葉県特攻勇士之像が建立・奉納された平成23年5月26日に合わせて、毎年5月26日に斎行されているものである。

当日は、千葉県隊友会、千葉県偕行会、千葉県東葛偕行会等からの出席者及び昨年柏市議会議員に当選した元海上自衛官阿比留義顕氏と当顕彰会からの小倉理事と私の2名を合わせて13名が参列した。

式次第は次のとおりである。

- ① 修祓
- ② 降神之儀
- ③ 献饌
- ④ 祝詞奏上
- ⑤ 玉串奉奠
- ⑥ 撤饌
- ⑦ 昇神之儀

やや曇りがちであったが、穏やかな天気の下、式は厳かに進行し、滞りなく終了した。

千葉県特攻勇士之像の副碑には、次のように刻まれている。

「我が祖国日本は昭和十六〜二十年

米英支ソ蘭豪と大東亜戦争を戦った  
 自国の安泰と欧米の植民地支配からアジアを解放するためだった 戦は連戦連勝南太平洋インド洋まで制圧したが物資の補給乏しく比島から沖縄と敵の反攻を許した この時一機一艇で一艦に体当りする歴史に例のない必死の特攻戦法が採られた 貧しくとも誇り高い民族の苦渋の選択だった 二十歳前後の若者の死への旅立ちを国民は合掌して見送った その勇姿を此処に置く 敗戦国に育ち歴史を絶たれた現代の人も 命に代えて何を守ろうとしたのか この像に問い続けて欲しい 戦後同二十六年五月三日連合軍最高司令官マッカーサー元帥が米上院軍事外交合同委員会での日本の戦は自衛のためであったと証言し米報道機関が全米に発信した日本国民よ この事実を銘記せよ」

（千葉県東葛偕行会会長

中江 仁撰文）



千葉県特攻勇士之像副碑



千葉県特攻勇士之像慰霊祭

千葉県護國神社の電話番号は、「043-251-0486」です。

## 人吉海軍航空基地跡の紹介

事務局員 金子 敬志

熊本県の人吉地域は、熊本県最南端の九州山地に囲まれた人吉盆地に位置し、人吉藩相良氏の城下町として栄えた歴史を持っています。

人吉市のホームページから引用しますと、「七百年が生んだ保守と進取の文化／日本でもっとも豊かな隠れ里－人吉球磨」

○慰霊祭参列について  
本慰霊祭は、毎年5月26日11時から斎行されますが、千葉県護國神社の主催であり、参列者が無くとも斎行することとで、特に案内状は出されません。どなたでも参列できますので、是非、大勢参列頂きたいと存じます。

慰霊祭は、境内の「千葉県特攻勇士之像」前で執り行われます。場所は、正面の石段を上がってすぐの右手になります。

千葉県護國神社へは、JR千葉駅、又は京成千葉駅から徒歩10分／13分です。車利用の場合の駐車場もあります。

平成27年度に、「相良七百年」に受け継がれた文化財や風習、地域の歴史を結びつけて紡がれた物語が、日本の文化・伝統の魅力を伝えるものとして、日本遺産に認定されました。

人吉球磨の領主相良氏は、急峻な九州山地に囲まれた地の利を生かして外敵の侵入を拒み、日本史上稀な『相良七百年』と称される長きにわたる統治を行った。その中で領主から民衆までが一体となった、まちづくりの精神が形成され、社寺や仏像群、神楽等をもに信仰し、楽しみ、守る文化が育まれた。同時に進取の精神をもってしたかに外来の文化を吸収し、独自の食文

化や遊戯、交通網が整えられた。保守と進取、双方の精神から昇華された文化の証しが集中して現存している地域は他になく、日本文化の縮図を今に見ることが出来る地域であり、司馬遼太郎はこの地を「日本でもっとも豊かな隠れ里」と記している。」とあります。

このように長い歴史を持ち、温泉や球磨川下りなどの観光で有名ですが、先の大東亜戦争末期、この地に海軍航空基地が在ったことを知る人は少ないと思います。

かく言う私もその一人ですが、人吉市在住の会員村上恵一氏からお教えいただきましたので、紹介いたします。

人吉海軍航空隊基地については、人吉市に隣接する球磨郡錦町在住の福田晃氏が平成27年8月10日から同年9月17日にかけて人吉新聞に12回にわたって詳しく書いておられるので、それをご覧いただくのが一番ですが、全部を会報に掲載するのは困難です。当顕彰会のホームページの「お知らせ」に掲載しますので、それをご覧ください。  
<http://www.tokkotai.or.jp/>

参考までに第1回掲載文の一部を引用させていただきます。

「山中の海軍

知らない人も多いのですが、かつて

相良村の南東から錦町の北西にかけて、海軍の航空基地が在りました。人吉海軍航空隊基地です。

その歴史ですが一九四三年十一月、海軍は、南方の激しい航空消耗戦に対処するため、「たかんばん（高原）」の台地に中継基地の建設を開始しました（本田寿夫「高原の予科練」。一九四四年二月、言うなれば、そこに間借りする形で、教育航空隊も人吉海軍航空隊基地に配置されました（田中千春「人吉海軍航空隊」。予科練の教育施設として利用されたわけです。

つまり、人吉海軍航空隊基地は、戦争のための兵站基地であり、同時にエンジニアやパイロットを養成するため教育基地でもあったわけです。今は「予科練のいた基地」とおもわれていますが、それは一面的な認識です。」

以下は項目のみを引用させていただきます。

- ・ 広大な基地
- ・ 全国稀な現存する多数の遺構

- ・ 基地の構成
- ・ 基地跡の可能性

また、錦町役場では、

「やまのなかの海軍のまち

ひとよし球磨へようこそ！  
人吉航空基地跡」

というパンフレットを作成し、遺構の場所等の紹介をしています。これを見ると、よくぞこれだけの遺構が現存しているものだと思心させられます。

更に、錦町役場では、人吉航空隊基地で厳しい訓練生活を経験された方々の様々な経験談などの情報を求めています。お話を聞かせただけの方は、左記へご一報いただければ幸いです、とのことでした。

連絡先・錦町役場企画観光課(蓑田)

電話 0966-3814419

なお、連載された新聞記事に併せて当顕彰会のホームページにも掲載していますので、ご覧ください。

## 世田谷山観音寺

### 特攻平和観音月例法要報告

(毎月18日14時より境内の特攻観音堂において執行、参加自由)

平成28年4月18日(月)月例法要

事務局員 金子 敬志

今月の月例法要参列者は21名で、堂内がほぼ満席となり、盛況であった。

法要は定刻14時に開始され、約20分で終了した。その後、旧小田原代官屋敷の本坊に移動し、直会が行われた。

初めて参列された小林さんは、「友人が特攻隊の歌を作ったので、歌を奉納できないかと思ひ、参列しました」とのことであった。歌は、日野美加さんが歌う「知覧の桜」であるが、月例法要を目の当たりにすると、歌と法要に参加する方々の気持ちにズレがあるように感じるとのことです。検討が必要と思われた。

もう一方初参列の鮎田英一氏の紹介があったが、謙遜されたのか、ご本人が仰らなかつた部分があったので、藤田副理事長より「鮎田氏は、海上自衛隊自衛艦隊司令官を務められた方です。自衛艦隊司令官とは、旧海軍の聯

合艦隊司令長官に相当する職であり、出身校は、自衛隊では珍しい東京大学です」との補足紹介があり、参列者の関心を引いた。この日は、最後の聯合艦隊司令長官小澤治三郎海軍中将のご令嬢大穂孝子様も参列しておられたので、ご縁を感じた次第である。

続いて、2度目の参列となる神尾さんより「上の兄、特操1期出身の神尾幸夫陸軍少尉は、昭和20年4月11日、飛行第105戦隊の一員として、台湾の宜蘭基地から出撃し、沖縄・中城湾で特攻戦死した。出撃時の様子を調べている」とのお話があったので、翌日当顕彰会の「特攻ライブラリー」にある『特操一期生史』や『特操一期生写真集』を調べてみたが、出撃時の様子を知ることができる資料を見付けることはできなかった。神尾幸夫少尉の出撃時の様子をご存じの方は、当顕彰会事務局金子宛てにお知らせ頂ければ幸いです。

その後は各テーブルごとに懇談し、16時過ぎに解散となった。

平成28年5月18日(水)月例法要

専務理事 衣笠 陽雄

今月の月例法要は、参列者18名で、

堂内はほぼ満席であった。体調が完全に回復された太田賢照山主と太田恵淳住職との調和の取れた読経で始められたが、終了後は何時も心安らかというか、ホッとする心境になるのは不思議である。最近、我が顕彰会の常連参列会員による本法要支援が行き届いていることに感心している。特に初めて参列する部外者の案内を始め、御宝前の奉納、観音堂内の案内、法要の説明、回し焼香補助、厨子の開閉等、法要支援に積極的に行動している。これらの行動は、結果として特攻隊員の慰霊・顕彰活動に繋がるものである。自分が知らないこと、できないことを他人に説明などできないことからすれば、サポートすることで何らかの為になるものを自然に身に付けているのである。今回はベテランの及川、倉形、原島、金子の諸兄姉であったので、動きがともスムーズであったのは当然かもしれない。若手会員にも、寺に常時置いたある「参列の葉」を参考にして、積極的な行動をお願いしたい。

本坊での直会では、藤田副理事長の献杯の後、参列者の色々な話を聞くことができた。最初に藤田副理事長から、特攻とは直接関係ないが、スリランカの初代大統領J・R・ジャヤワルダナ氏についての紹介があった。氏は

1951年、サンフランシスコ講和会議に、セイロン代表として出席し、ソ連等の日本分断、主権制限、高額賠償金等の主張の中で、敗戦国に対し、利害を超えて尊敬と共感を表明し、日本の独立を支持し、日本を擁護する演説を行い、欧米諸国の代表に深い感銘を与えた。これは正に仏の教えであったが、会議の流れを変え、戦後日本の国際社会復帰を大きく後押ししたのである。東京裁判で法の正義と歴史の道理を守り抜いたインドのパール博士や蒋介石と共に忘れてはならない一人である、との話があった。この話に関連して、金子事務局員の自衛隊での友人が、スリランカのお寺で坊主として務めている話、太田恵淳住職からは、イスラム教の侵入に対して仏教徒たちが取った対処要領の話、最近の御朱印に関する本来の意味と現況に関する話があった。

次いで、藤田副理事長からサミットでのオバマ大統領の広島訪問について、反対勢力の妨害があるが、この訪問の意味が歴史に残るものとしなければならぬ。世界で始めて核を使用した国と被害を受けた国が恩讐を超えて考える必要があり、同時に世界・人類の今後の課題である、との所見があった。



直会5月の状況

介したところ、慰霊祭後直ぐ、「中学校以来始めて思いっきり君が代を歌えた。感動した」とのメールをもらい、驚き、かつ感動した。世界各国の国歌と比較すれば分かるが、君が代は音階が違う。君が代は、「よな抜き音階」(注：西洋音楽の長音階のうち、ファ【四】とシ【七】が無いドレミソラのみの音階)の曲であり、「他の国の国歌とはメロディーが違う。日本にしかない独特の音階なので皆で歌おうよ」と、昔中学校で教えたことがある。皆に歌わせるための理由として良いのでは、との話があった。

今回の直会は、色々な話が出て、どれも意義深い内容で、それぞれが納得できるものであった。また、司会の恵淳住職の軽妙なコメントも素晴らしかった。最近お聞きしていない賢照山主の法話も復活して頂ければと思う。

**平成28年6月18日(土)月例法要**

評議員 及川 昌彦

今回の月例法要の参列者は14名でした。観音堂での読経後、旧小田原代官屋敷に移動して直会となりました。

献杯の音頭は、久し振りに教え子と同伴して参列された、国土館大学で旧



直会6月の状況

枢軸国の英霊顕彰に関する比較検証を研究している松藤昭先生でした。

最初の挨拶は、元帥畑俊六陸軍大将の嫡孫の畑政宏氏でした。陸軍航空本部長(1935-1936年)として多くの特攻隊員を送り出したことに、感極まり鳴咽しながらの挨拶でした。ご子息が防衛大学校60期を卒業し、現在は奈良の航空自衛隊幹部候補生学校在学中です。太田賢照山主によると、畑元帥は、類繁に、世田谷観音寺の特攻観音の慰霊祭に参列されていたそう

です。昭和37年棚倉での戦没者慰霊碑除幕式参列中に倒れられ、82歳で逝去されました。

廣嶋文武氏からは、英国人で特攻隊について研究されているシェフタル先生の近況について報告がありました。

先日、水交会で「海軍と酒」という講演会があり、特攻隊の出撃時の水杯は清酒だったと証言されていたので、野口剛さんに確認したところ、野口さんの部隊では水だったとのことでした。主計将校によると、出撃直前に清酒の注文が大量に出るので、そうではないかとの推察でしたが、部隊によってまちまちのようです。次回7月18日の法要も祝日なので、より多くの方に声掛けして参列を促したいと思っております。

### 事務局からのお知らせ

#### 一 第65回特攻平和観音年次法要の斎行について

恒例の特攻平和観音年次法要が平成28年9月22日（木曜日・秋分の日、今年は閏年なので、23日ではなく22日です）からお間違いないようにして下さい。の午後2時から世田谷山観音寺

特攻観音堂において、例年のとおり、駒繁神社との神仏習合により斎行されます。

この年次法要の詳細につきましては、同封の「年次法要のご案内」に記載しておりますので、皆様方お誘い合わせの上、多数ご参列賜りますようお願い申し上げます。

#### 二 平成28年度の会費納入について

平成28年度の年会費が現時点で未納となっております方につきましては、今回同封の「郵便払込取扱票」の会費欄に、入金済の表示がなく、「年会費納入のお願い」が封入されていますので、平成28年度の年会費の納入方よろしくお願い申し上げます。

なお、会費欄に、入金済とゴム印で表示されている方は、本年度の年会費は既に納入済となっております。

特攻平和観音年次法要に参列される方は、同封の「郵便払込取扱票」の出欠欄の出席に○印を記入され、お布施を含め、その他必要な金額をお払い込み下さい。

#### 三 税額優遇制度に関する説明

以前にもご案内し、また、ホームページにも掲載しておりますが、当顕彰会は、総理大臣から「税額控除対象法人」として認可を受けており、年度の会費及び寄附金の合計（寄附額）が対象となっております。この寄附額から2千円を差し引いた金額の40%が税額控除と

なり、計算される所得税から控除を受けることができます。現在の事務処理は、毎回の振込時に、1万円以上を寄附される場合に限り、税額控除証明書と寄附金領収書を自動的に送付していますが、会費のみ3千円でありましても、確定申告のため領収書が必要な方は事務局に申し出て下さい。

また、これまで総理大臣からの「税額控除に係る証明書」の有効期限は、平成28年7月31日までとなっておりますが、この度、更新手続を行いましたので、平成33年7月31日まで有効な証明書をお送りいたします。

#### 四 「靖國カレンダー」の幹旋

昨年初めて、「靖國カレンダー」の幹旋紹介書面を同封しましたが、今年も同様の案内書を同封しますので、必要な方は、内容を確認の上、事務局に申し込んで下さい。申し込み要領は、「郵便払込取扱票」の靖國カレンダー欄に必要な部数及び送料を合計した金額を記載し、その他の金額と共に払い込んで下さい。

ただし、カレンダーは、「英霊にこたえる会」からの直接の発送となりますので、ご承知おき下さい。

### 事務局からの報告等

#### 寄附者御芳名（敬称略）

（平成28年4月1日～6月30日）

（単位千円）

- 七 松澤 健 七 渡部 利久
  - 七 丸井 容子 五 常泉 昭亘
  - 五 松本 聖二 四 早坂 正子
  - 三・五 藤本英憲 二 常井 功子
  - 二 安藤佐智子 一 中島 實
- 御芳志誠に有り難うございました。

#### 新入会員名簿（敬称略）

（平成28年4月1日～6月30日）

- |      |       |       |  |
|------|-------|-------|--|
| 北海道  | 入谷 芽衣 |       |  |
| 秋田県  | 梅原 克彦 |       |  |
| 群馬県  | 鈴木 敏博 | 鈴木 信行 |  |
| 埼玉県  | 南雲 芳夫 | 太仲 勇治 |  |
|      | 中原 宏明 |       |  |
| 千葉県  | 山下 修  | 戸辺 好郎 |  |
| 東京都  | 黒川壯之介 | 松村 克弥 |  |
|      | 高尾 敬子 |       |  |
| 神奈川県 | 堀田 和夫 | 藤原 道明 |  |
|      | 藤田 綾  |       |  |

京都府 佐藤 篤彦  
 大阪府 勝又 康成  
 広島県 寺崎 慶子  
 鹿児島県 平田 辰雄

◆ ◆ ◆  
**会員訃報** (敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

山形県 小林孫一郎 (28・1)  
 岩手県 岩田彦一郎 (28・1)  
 茨城県 桑原 義一 (28・5・11)  
 茨城県 菊地 洋 (27・11・28)  
 千葉県 瀬川 忠行 (28・3・29)  
 東京都 矢吹 朗  
 大野 俊雄  
 遠藤 哲夫  
 戸塚 新 (27・6・21)  
 滝澤 勇吉 (28・5・2)  
 神奈川県 斎藤 正夫 (28・4)  
 三重県 新井 郁男 (27・11・21)  
 京都府 大原 昭二 (27・9)  
 兵庫県 野上 五夫 (28・3・7)  
 岡山県 高原 忠敏 (28・5・31)  
 香川県 小路 俱視 (28・1・5)  
 広島県 岡崎 明 (28・5・10)  
 大分県 山本 茂 (28・4)

**会報「特攻」第110号正誤表**

次のとおり誤りがありましたので訂正し、謹んでお詫び申し上げます。(訂正箇所)

9頁3段10行目  
 誤 あった。「俺の形見に・・・」  
 正 あった。「俺の形見に・・・」

11頁写真説明(キャプション)  
 1段目右  
 誤 向かって左より藤田副理事長、東内治子様、名和まさゑ様、名和まじどか様  
 正 向かって左より藤田副理事長、名和まさゑ様、東内治子様、名和まじどか様

2段目  
 誤 東内様 他  
 正 名和まさゑ様 他

3段目  
 誤 東内様(左)  
 正 名和まさゑ様(左)

4段目  
 誤 東内様(左)と名和まさゑ様(右)  
 正 名和まさゑ(左)と東内様(右)

5段目  
 誤 東内様(左)と名和まさゑ様(右)  
 正 名和まさゑ(左)と東内様(右)

37頁3段本文4行目  
 誤 : : : を書いてきた。若者の純粋な気持ちを良く表していると思われるので、ここに紹介します。  
 正 : : : を書いた。(以下削除)

**会員ご入会のご案内**

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願い、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革  
 昭和34年5月前身の特攻平和顕彰会  
 昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

初代会長 竹田 恒徳 元宮様  
 二代会長 瀬島 龍三 氏  
 平成5年11月財団法人認可  
 三代会長 山本 卓真 氏  
 平成23年1月公益財団法人認定  
 現会長 杉山 蕃 氏

○当顕彰会の主な事業  
 ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰  
 ・広報誌等の発行  
 ・講演会等の開催その他

○年会費  
 ・一般会員 3000円  
 ・学生会員 1000円  
 〒102-0073  
 東京都千代田区九段北3-1-1  
 靖国神社遊就館内 公益財団法人  
 特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局  
 電話 03-5213-4594  
 FAX 03-5213-4596

**「ご投稿について」のお願い**

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会事務局にお任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛とさせていただきます。

〒102-0073  
 東京都千代田区九段北3-1-1  
 靖国神社遊就館内 公益財団法人  
 特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局  
 電話 03-5213-4594  
 FAX 03-5213-4596